

K.バルトの「キリスト者の生」 —主の祈りの神学的釈義—

“Christians’ Way of Life” by Karl Barth
—Theological Interpretation on the Lord’s Prayer—

中 澤 實 郎
Jitsuro NAKAZAWA

- 一. 序
- 二. 父
- 三. 子ら
- 四. 呼びかけ
- 五. 神の誉れを求める熱心
 - 1. 大なる情熱
 - 2. 知られかつ知られざる神
 - 3. 御名を崇めさせ給え
 - 4. 神の言の優位
- 六. 人間の義を求める闘い
 - 1. 無秩序に対する蜂起
 - 2. 主無き諸権力
 - 3. 御国を来たらせ給え
- 七. 義が為されよ
 - あとがき

一. 序

J.M. インガーは、宗教の定義として13のカテゴリーをあげている。①超自然的なものへの呼びかけ（祈り）、②音楽、③生理学的な訓練（苦行・禁欲）、④訓戒・勧告、⑤經典の朗誦、⑥シヨミレーション（統制を目的とする事物の模倣）、⑦マナ（聖なる力を宿すものに触れること、按手）、⑧タブー、⑨祝宴、⑩供儀（生け贄・献金）、⑪会衆（集会）、⑫靈感（啓示・改心）、⑬象徴、などである。⁽¹⁾ 祈りは、すべての宗教の必須要件である。それは、キリスト教においても事情は同じである。イエス・キリストご自身が祈り、弟子たちにも祈りを教えられた。その祈りを「主の祈り」という。テルトゥリアヌスは、主の祈りを「福音全体の要約」（breviarium totius evangelii）と表現している。⁽²⁾ 「主の祈り」の解説はマルチン・ルターをはじめ、多くの著書が出版されている。バルトは「主の祈り」を、「洗礼論」と併せて『和解論』で取り上げる予定だったという。しかし、「洗礼論」は、一つの「断片」で、「キリスト教的生の基礎づけ」として公開された。バルトは、「洗礼」は、「礼典」ではなく、キリスト者の生活の出発点、基礎づけであり、「主の祈り」は、生活の中心として「神への呼びかけ」とし、「聖餐」は、神への感謝を捧げキリスト教生活の更新と考えた。

「主の祈り」の講解は、未完の「遺稿」である。バルトは、「洗礼」「主の祈り」及び「主の晩餐」

（Abendmahl）を「キリスト教的生」の人間に命じられている〈神への呼びかけ〉（Anrufung Gottes）という視点で論ずる予定だったのである。

本論は、「主の祈り」の未完の原稿の中から必要に応じてバルトの神学的積義を考察してみたい。

注

- （１）J.M. インガー 『宗教社会学』金井新二訳（ヨルダン社）1989年 p.45
- （２）KARL BARTH 『Das christliche Leben』
『キリスト教的生』天野 有訳（新教出版社 1998年）P.105

二. 父よ

キリスト者とは何か。それは、キリスト教的団体の一員というものではなく、個人的に敬虔で信心深く、確信に満ちた人のことでもない。キリスト者とは、イエス・キリストとの関係から生じる拘束と義務の中にある人であるとバルトはいう。^{（１）} 神への義務とは、「神への呼びかけ」である。これこそが、イエス・キリストに結びつけられ義務つけられた者としてのキリスト者に期待されていることである。「神への呼びかけ」は、「主の祈り」として指示されている。祈りは、信じることの法則であり、それは、「生きることの法則」である。

神への呼びかけの言葉は、「天にましますわれらの父よ」である。この呼びかけをする者は、自分自身の欲求、必要、趣味によって祈るのではない。彼らは、このように祈る指示と教示を受けているのである。即ち、神への呼びかけは、恣意的にしたり、しなかったりすることができるような行為では決してなく、高次の命令に端的に従う行為なのである。

マタイによる福音書では、祈るように「命じて」いる（６：９）。だが、ルカでは、弟子の一人が「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」（11：１）という願いに対する答えとして『祈るときには、こう言いなさい』と言われたのである。両福音書におけるイエスの指示と教示は、差し当たり典礼上の教育という性格を持っているが、しかし、この教育の重点は、啓蒙という点にあるとバルトはいう。^{（２）} というのも、マタイ６章７節以下では、周辺の或る特定の集団に向けられた非難を前提としている。「異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思い込んでいる。彼らのまねをしてはならない。」。イエスの指導は、「よりわずかな言葉を、しかしその代わり正しい言葉を」と。しかもそこで前提されているのは、「父なる神は、彼らの近くにおられ、彼らに必要なものを前もって知り、したがってその必要なものをくどくどとした申し立ても懇願も、何ら必要としない。人はただ、神がご存知の困窮のさなかにあって神に身を向けてより頼み、そのあるがままの困窮した者として神に呼びかける、そのことだけを神は求めておられるのである。

他方、ルカ福音書の強調は、次の点に置かれている。彼らが端的に神に呼びかけるとき、祈りが聞き届けられること（Erhörung）を当てにすることがゆるされ、またそうすべきであるという点である。人間が神に聖霊を乞い求めるところでは（ルカ11：13）、以上のことを欠けてはいけな。即ちそこでは、乞い求めのすぐ後に賜物が、探し求めることのすぐ後に見出すことが、叩くことのすぐ後に聞けてもらえることが続くのである。そこでは、彼らが行うことは無駄にされることはありえない。それはちょうど、図々しく夜中にやってきて三個のパンを求めるあの乞い求め（11：５）や、あるいは、腹を空かした子供が父親に走り寄って一匹の魚や一個の卵を求める乞い求め（11節以下）が無駄になることがないのと同様である。

マタイ福音書では呼びかける者たちを見抜いておられる父が、ルカでは彼らの呼びかけを聴き届けておられる父が、問題なのである。「父よ」というこの呼びかけは、ルカ11：2では、まったくただそれだけである。マタイで6：9では、「われら」および「天にまします」という二つの補足語によって説明されて、主の祈りは開始する。

「父よ！」(Vater)、この言葉は、もしそれがキリスト教的人間(christliche Menschen)の思惟と言葉において神を表示すべきであるならば、この言葉が主の祈りの開始を告げる歌であるとすれば、厳密な意味で、呼格(Vokativ)として用いられ理解されることを欲している。バルトは、この「父」という言葉のキリスト教的用法と理解を根本規則と呼ぶなければならないという。⁽³⁾したがって、この根本規則は、「父」という言葉が、直接的な語りかけの文章においてではなく、通常の文章において用いられる場合であっても、二人称ではなく、三人称によって語られる場合であっても、熟慮しなければならない。キリスト教的人間は、そこで神が問題となる場合には、真剣に・本来的に・厳密には、父を部分的であれ全体的にであれ、対象化して語ることはできず、ただ父に向かって語ることができるだけである。即ち、人が父に向かって語るすでにその前に、もしくは、語りかけが起こらない場合であっても、神はご自身において現に父であるという認識においてのことである。従って、それは、神が彼らの語りかけにおいて、また、その力によって初めて父となる、という考えにおいてではない。それゆえ「父」は、キリスト教的に思惟され語られているところでは、「神」同様、何らかの人間的に「実存論的なもの」として理解することはできない。だが、キリスト者は、父としての神の存在(Sein)に関する自分たちのその認識を、ただ行為をもってのみ遂行できる。「ただ行為をもってのみ」とは、「我は父なる唯一の神を信ず」(credo in unum Deum Patrem)〔ニカイア・コンスタンティノポリス信条〕という父に向かっての告白の姿と力においてのみということである。

「父」と我々は言う。我々がこの言葉を神に対して用いつつ敢えて口にすると、否、すでに「心の内で」敢えて考えているとき、そこで我々が認識しなければならないのは、「ああ、父よ」・「汝、父よ」・「然り、そうです、父よ」なのである。呼格としての「父よ」は、それが「心の内で」考えたものであれ、口にしたものであれ、思惟の根源形式・言語の根源音・キリスト者に命じられている従順の根源行為、あるいは、キリスト者に与えられている自由の根源行為、即ち、キリスト者が父の信実に対応しようと願う信実の根源形態なのである。それゆえ、もしも、キリスト者の思惟と言葉がこの呼格を欠いているとしたら、また、彼らの生活が、最初から最後に至るまでこの呼格によって担われ規定されているのではないとしたら、彼らは、自分がキリスト者であることを忘れてしまっているか、それとも否定してしまっているにちがいない。あるいは、肯定的に言えば、彼らが従順において行う全てのことは、ただ、この「父よ」という呼びかけの反復・応用・具体的形成でのみありうるだろう。⁽⁴⁾

父よ！神は、いかなる意味においても、他の諸々の存在によってこのような方であるのではなく、徹頭徹尾彼らのためにこのような方(父)である。神は、本質的に、その内的・外的栄光全体において父である。そして、この父として、神は行為し語られる。それゆえ、このような神ご自身に最も固有な、あの父という本質に対応する神の要求に従順となる者たちにとって、最初から自明でなければならない。キリスト者が呼びかけるべき「父」とは、その父が単に「父親性」(Väterlichkeit)の理念や総体のようなものにすぎない、ということの意味するものではない。キリスト者が呼びかけるべき「父」とは、それどころかむしろ、根本的に、真実に父なのである。それ故に、父は、どんな場合でも確かに、語りかけ、聴いてくださり、人格的に行動される。この父は、「父親性」ということで何が理解されうるにせよ、「父親性」がこの人格の本質固有性および本質啓示であることに一切はかかっている。それゆえ、逆ではない。即ち、この人格が、それ自体で本来的に、現実的でニュートラルな父性的栄光の人格化である、というようなものではない。キリスト者が心の内に考え、口に出し、生きる場所の「父よ！」という呼格と共に、そのように呼びかけられている方は、単に付随的ではなく中心的に、単に相対的ではなく

く絶対的に、単に暫定的ではなく究極的に主体として、即ち、父としての「汝」(Du)として語りかけられつつ、それゆえ父としての「我」(Ich)として肯定されつつ、文字通り真剣に受けとめられるのである。キリスト者が心の内に考え、口に出し、生きようと力づけられ要求されているあの呼格は、何の留保も他意もない端的な呼格のである。あの呼格は、「父」という自立的主体への呼びかけ、神への呼びかけである。⁽⁵⁾

新約聖書における父への呼びかけは、「叫ぶこと」(ガラテヤ4:6)、「うめくこと」(ローマ8:23)「歌うこと」(コロサイ3:16、エペソ5:19)でもあり、さらに、「歎呼すること」(ルカ10:21)であり、本質的には、感謝を語ることであり、賛美することであり、とりわけ、祈り願うことと執り成し祈ることであり、いずれにせよ、声高なもしくは静かな語りかけである。そこで語りかけがなされるとき、語りかけているものの人格的存在のみならず、語りかけられている者の人格的存在もまた前提されているのは明らかである。そこでは明らかに、呼びかけられている者が聴いているということが考慮にいれられている。いやそれ以上に、呼びかけられている者へ発せられている呼びかけと同時に、その応答として、呼びかけられている者自身の呼びかけがなされるということが考慮に入れられているのである。従って、そこで呼びかけられている者もまた決して、物ではないということ、どんなに高貴であっても聴く耳を持たず語る口も持たない「理念的事物」では決してないということ、いかなる意味においても、「或る物」、「一つの物」では決してない。むしろ、「そこで呼びかけている者に対するまったき他者性の中にありつつ」或る方だということ、即ち、ご自身「語りかけられる用意のある」或る方だということが考慮に入れられているのである。そのような方を、キリスト者が「父」として呼びかけているのである。

「父よ!」。このように呼格として理解されつつ、この語は、キリスト者の思惟と言葉においては、それ自体としては不特定でかつ空虚で多義的な語でありながら、「神」なる語の命ぜられた厳密化、事柄に相応しい内的充填(Füllung)、真性の権威ある解釈なのである。「神」という語は、或る人にとってはすべてを意味し、別の人にとっては偶然のことと、幻想を意味する。「神」という語を心に思い口にすると、誰が、その人の抱いている神に関するイメージや概念を正しく主張することができるのか。キリスト者が「父よ!」と呼びかけ、叫び、うめき、歌い、歎呼し、父を賛美し感謝し、そして何よりも父に祈り願うとき、即ち、キリスト者の生活がこのような呼びかけにおける生活であるとき、彼らはあの霧がかかった景観全体のただ中を突き抜けて歩いているのである。いかに偉大なる頭脳明晰を持ち、またいかに深い思索の持ち主でも、そのようなものが、その人をキリスト者にするのではない。人をキリスト者にするのは、彼が神の言葉を聴き取っているという事実によるのである。従って、キリスト者は、神に関する様々な見解を巡る争いを勝ち抜いてきたわけではない。彼らは、「わが子らよ」という神の語りかけを聴く。「神は神について正しく語られる」(パスカル『パンセ』799番)。それに対してキリスト者は、「われらの父よ」という呼びかけによって応えるとき、そのことによって、彼らは神を正しく認識し告白しているのである。彼らは「子供のように」信頼し平安のうちに、喜ばしく口にすることができるのである。

バルトは、「神」と「父」との間にある意味関連を新約聖書から取り上げる。「父である神」(テサロニケ1:3、3:11)、「わたしたちの主イエス・キリストの父なる神」(コリント二1:3、エペソ1:3、ペテロ1:3)。神に関する表示は、通常「父なる神」という短縮された定式において遂行されている。いずれにせよ、誰か或る父を神と定義することではなく、神を父と定義することが重要なのである。キリスト者は、父である神を、神として知り承認し告白する。この神を念頭に置きつつ、この神に訴えかける願いと共に、使徒たちは諸教会へ挨拶を送る。この神を認識しつつ諸教会は使徒と結ばれている。ガラテヤ1章1節によればパウロは、父なる神を、主の祈りで「われらの」父と規定されているように、自らの使徒職の設立者として主張する。また「恵みと平和とが私たちの父なる神からあるように」という定型表現は、パウロが宛先人(教会)に対して用いるステレオタイプの挨拶となっている。ピリ

ピ2:11では「父なる神」の「栄光」について、ペテロー1:2では「父なる神」の「予知」について、コロサイ3:17ではキリスト者が「父なる神」に捧げるべき「感謝」について記している。この「父」であるところの神は、ヤコブの手紙でも2回(1:27, 3:9)使われている。そしてヤコブ1:17では、あらゆる良き贈り物の源として「諸々の光の源の父」が表示され、同じくヘブル人の手紙12:9では、すべての人間としての父に優るところの「諸々の霊の父」が表示され、「神=父」という等式が前提とされている。かくして、「神」という語は、明らかに「父」という語に統合、包含され消失することもできる。例えば、ローマ6:4で「キリストは父の栄光によって復活された」と言われているように、また、コロサイ1:12には「父は、キリスト者を聖なる者たちの相続分にあずかるのにふさわしい者とされた」。

類似のことは、四福音書にも妥当する。しかも、ヨハネ福音書では、「父」の用法が「神」の語の二倍以上もある。また、「父」と「神」という両者の相互関係の概念はわずか四箇所だけである(5:18, 6:27, 8:41, 20:17)。共観福音書は、「神」の用語が優勢であるが、「神」と「父」の関係はどこにも現れていない(父という語は132回、神は80回である)。その代わり、福音書には、「父」という語は、ただ、主の言葉(父よという呼びかけ)においてのみ使われている。「父よ!」という呼びかけは、ただイエスにのみ帰されている語りかけの言葉(Anrede)なのである。しかしまた、父に関する言明も、ただイエスの口から発せられている。父とは、イエスの父なのである。「わが父」とは、マタイ福音書によれば、「天の父」あるいは「天におられる父」である。主の祈りでは、しかも主の祈りにおいてだけ「われらの父」として告げ知らせることは、ただイエスにのみ相応しいのである。⁽⁶⁾

「父よ!」という呼びかけによって「神」という語に起こる精密化、内容充填、解釈とは何であろうか。「神」は、「父」という呼びかけによって或る家族や共同体の創始者・頭として、表示することができるのか。確かに、そのことも、可能だろう。だが、そうではない。この方なしには、この共同体は現実存在することができないのである。「父」という言葉をキリスト者が用いるとき、その共同体は、徹頭徹尾神に依存しており、神と一体となっているのである。しかし、神とこの共同体とは、類縁関係はない。神は、共同体の産みの親ではないからである。「父」は、唯一の真の神を意味している。「父」は、ただ比喩(Gleichnis)としての証言をしているだけである。

古代ギリシャ人たちも、彼らのゼウスのことを「父」と呼んだ。ゼウスは「人々と神々の父」と呼ばれているが、しかしそれは、ギリシャ人たちの父祖として、それゆえ同輩中第一位を占める者としてであって、彼らの創造主としてではない。新約聖書における「父なる神」は、その方から万物が出るところの父(一コリント8:6)であり、「万物の上に万物を貫いて万物の内にいますところの万物の父なる神」(エペソ4:6)であり、「その方から天上にあり地上にある一切の父性がその名に与えられているところの父」(エペソ3:15)である。マタイ福音書では、「天におられる父」と特徴づけている。天とは、万物・万人に対して絶対的に優越しているということを考えなければならない。「天」は、地上の万物・万人にとっては到達不可能であり、創造主である。そのような方として万物・万人から区別すると同時にそれらにご自身を結びつけ、超越と同時に、それらに内在されるのである。即ち、ご自身の被造物に支配されず、被造物によって呼びかけられることを可能とされたのである。⁽⁷⁾

「父よ!」この呼びかけは、今や、きわめて特別な強調点を持ってあの証を目指していることは明らかである。即ち、神に呼びかける者が、自己自身・万物・万人がそこに絶対に依存し、かつそれによって制約されていると知っている証を。その限りにおいて、「絶対依存の感情の淵源」としての神、というシュライエルマッハーの定義は否定されえない。だが、彼の定義は不十分である。何故なら、この「淵源」(Woher)は、或る中性物・或る根源的な何物かでもありうるからである。シュライエルマッハーによれば、事実そのようなものである。もし、彼の定義が神を「汝」(Du)ととして、「主体」として理解しているならば、そのとき彼の定義は、「天におられる父である神は、世界と人間との根源である」というレベルを明らかに超えていたにちがいない。そのとき「神」は、絶対的な創始者としてのご自身の父

性によって基礎づけられた働き (Funktion) の中におられる神。万物・万人に対するご自身の支配領域と所有における家長・保護者・教育者として、また主・王・裁き主としてのご自身の業の中におられる神。創造主として、ご自身の被造物の存在と生の連続性に対する、つまり被造物の過去・現在・未来に対する責任を、自由な処分権能をもって倦まず弛まず間段なく信頼しうる仕方で担い遂行される方としてのご自身の業の中におられる神として理解されたにちがいない。「父よ!」とは、このような神に対する「絶対」畏敬の呼びかけなのである。それは、最高に強力な〈中性物〉ですら、しかも創造的根源という資格においてであれ、人間から引き出すことの不可能な畏敬である。

この呼びかけは、キリスト者によって語りだされる場合には、つまりキリスト者が主・王・裁き主なる神へと向けられるときには、この呼びかけそのものは、神の存在と行為の中の或る特別なもの (Spezifisches) を意味している。「神」という語の精密化・内容充填・解釈のための最後の言葉は、神を万物・万人に目を注ぎ治める家長・統治者・裁き主として表示し理解することによっても、まだ語られていないのである。実際、神を「全能者」として呼びかけることが何を意味するかは、この「全能者」 (Allherrscher) がそれによって存在し働いているその霊によって、実にまったく左右されているのである。

父というものは、産み出す者であるだけでなく、同時に家長・保護者・教育者・主・王・裁き主でもあるというイメージは明白である。これに対応する神というイメージは、昔も今も決して未知の考えではない。しかしそれは、何の根拠もなく確実ではない。そして何よりも、畏敬や信頼へと向かわしめるものではなく、必然的というよりも、むしろ偶然的な考えであり、実践的に効力を持つというよりもむしろ思弁的かつ審美的なものにすぎない。

ところで、新約聖書の人間も、神をこのような父性的働きにおいて認識している。即ち、新約聖書の人間は、自分たちは、すべて全能者と関わっているという認識の内に生きている (黙示録 1 : 8)。「アッパ父よ、あらゆることがあなたの力の領域内にあります」 (マルコ 14 : 36)。このイエスの語り掛けは、ゲッセマネの祈りのなかで言われている。また、ヨハネ 5 : 17の「わたしの父はこの時に至るまで (御子の働きの終末的な時に至るまで) 働いておられる」というイエスの言葉も、あの父性的な全能の働きに関係づけられる。神は、実に、「種も蒔かず刈り入れもせず倉に納めることもしない鳥たちを養われる父である。働きもせず紡ぎもしない野の百合をソロモンの栄華を凌ぐほどに育てる父である。」 (マタイ 6 : 26以下) また、「父の意思なしには、一羽の雀さえも死して地上に落ちることなく、まして、父に属する者たちの髪の毛までもすでに数えておられる父であり (マタイ 10 : 29)、かれらの必要なものを、かれらが求める前に知っておられる父である (マタイ 6 : 8)。従って、父に属する者にとっては、身体と生命のための「思い煩い」 (マタイ 6 : 25) を無用なものとし、そのような思い煩いは、異教的な不従順とみなしたということは、大いに理由があったのである。⁽⁸⁾

「父よ!」この呼びかけは、キリスト者の意識において、キリスト者の口から発せられるときには、「愛するお父様」を意味している。従って、あまりにも水増しされ誤用されてきたあの表現を避けることはできない。即ち、「愛する神様」をよく注意していただきたいが、この表現は、キリスト者が今ようやく決断しそれを聞いとらねばならないような、神についての、より厳密な定義ではないからである。キリスト者は、神を礼拝する者たちの思いや願いの中だけ愛すべきであるような神様ではなく、その愛において自由であり全能であり主権的であられる神を知っているのである。キリスト者は、この神を、人間と万物の創造主および主として知っているのである。キリスト者がこの神に感謝しこの神を賛美するとき、彼らはこの神に何ものかを付け加えているのではない。そうではなく、キリスト者がこの神に身を向けるのは、この神ご自身の本質および行為によって不可避免的に求められていることなのである。同様に、キリスト者が祈り求める者としてこの神に走り寄ってゆく際に抱いている信頼も、何ら自分勝手な要請でも冒険でもなく、むしろ、その被造物にとって善き創造主であるこの神の存在への、彼らの

当然の承認なのである。それゆえに、それは強制された感謝・賛美・祈りではなく、喜ばしい感謝・賛美・祈りである。

キリスト者とは、世界と自分自身からは架橋されえないが、神の側からはすでに架橋されている隔たりにおいて、神から愛されていることを見出す人々、そしてこの愛されているという事実に基づいて自分の側からも、その応答としてこの神を愛する人々のことである。しかも、彼らが、「アッパ父よ！」とこの神に叫ぶときにこそ、この方から遠く離れている者でありながら、今やまったく近い者であり、この神を愛すべきもののなのである。⁽⁹⁾

「父よ！」これまで述べてきたことによっては、いまだなお、この呼びかけがキリスト者の思惟と言葉において意味し表示しているところの主語 (Subjekt) に関する最後の事柄を語ったことにはならない。これまで取り上げてきたのは、キリスト者によって呼びかけられている「父なる神」という主語に属する様々な述語 (Prädikat) だったのである。即ち、万物の創造主としての神存在、一切の善の自由なる根源としての神存在についてこれまで取り組んできたのであった。では、これら述語の主語とはどういうものののだろうか。主なる神とはどなたなのであろうか。

この方から切り離されるならば、場合によっては「父よ」とキリスト者が呼びかけるとき、彼らが仰ぎ見るその方向とはまったく別の方向を指し示すということもあり得るのであるとバルトは言う。例えば、きわめて真剣にかつ強い信仰心において、戦争を万物および人間の父・主として賞賛し喝采してきた人々がいたのではないだろうか。もし人があれらの述語すべてをその主語から抽象するならば、そのときそれらの述語は、キリスト者に自明なのとはまったく異なった仕方では理解され解釈されてしまうのである。創造主はその被造物の姿に従って理解され、統治者はその家の居住者たちの自己賛美のシンボルとして理解され、その方の恩恵は種々の人間的願望および欲望の理想に近い形の成就として理解され、その方の憐れみは人間が自分自身に対して持っている同情の神話的反映として理解されてしまうのである。「父よ！」と呼びかけられている方は、キリスト教的認識によれば、現実に真に父なる神であられるという事態とその根拠について明確でないかぎり、たとえそこに含まれている神に関する述語の性質を追求するとしても、あまりにも多義的な企て、風を捕まえようとする企て (伝道の書 1: 14) として提示されるであろう。

ところで、キリスト者によって「父」と呼びかけるべきあの主体の性質および存在に関して決断を下すことは、キリスト者の事柄ではない。その決断は既に、別のところで下されているのである。キリスト者は、ただその決断に日々新しく従順 (Nachvollziehen) を続けることである。イエス・キリストは、その存在・業・言葉において「父なる神」という主体の性質と存在に関するあの決断が起こり啓示された主である。キリスト者は、「アッパ、父よ！」と昂然として呼ぶならば、そのとき彼らは、「父なる神」という主体の性質と存在に関するあの決断、即ち、イエス・キリストにおいて、みずから神的權威の内にありつつ、遂行されたあの決断に由来しているのである。⁽¹⁰⁾

パウロの挨拶は、わたしたちの父なる神から、およびイエス・キリストの父として表示する。これは、何を意味するのであろうか。イエス・キリストは、ご自身の父と同一の神的本質を持ち、それゆえこの父の意思の完全な遂行者および啓示者であることによって、ご自身の教会の主として、キリスト者に《神は彼らの父でもあられる》ことを保証する方であり、神を彼らの父として認識することをキリスト者に可能ならしめる方であり、神を彼らの父として呼びかけることを赦される方である。かくして神との関係におけるキリスト者の約束された存在は、その一体性において、父なる神の業と賜物であり、主イエス・キリストの業と賜物である。かくしてキリスト者に約束されている恵みと平和は、イエス・キリストが彼らのための唯一の仲保者および啓示者であるがゆえに、イエス・キリストの業およびイエス・キリストの賜物として理解され表示されるべきなのである。

では、人間がイエス・キリストを通して神との関係へと移し入れられることはどのようにして起こるのであるか。それは、イエス・キリストが彼らに神への呼びかけへと力を与え、招き、要求されるという端的な事実によって起こるのである。彼らの主であるイエス・キリストに従うことによって、彼らは父なる神との関係へと移し入れられるのである。なぜなら、イエス・キリストご自身が、〈父なる神への呼びかけ〉を最初の者として実践したという事実によって、彼らをご自身の祈りの運動の中へ導き入れたのである。イエス・キリストの歴史が過ぎ去った現象でないならば、イエス・キリストが死人の中から復活しご自身の聖霊の力において、今ここで、ご自身の教会とキリスト者の生ける主であるならば、彼はただ単に〔かつて〕おられただけではない。彼は、今ここで、父なる神へと向かうあの〔祈り〕運動の只中で存在し、すべての人間に代わって、それゆえすべての人間の先頭に立って、父へ呼びかけの只中で存在しているその人である。そうであるならば、彼は、〔かつておられ〕〔今もおられ〕るということによって、彼を自分の主として認識し承認するすべての者にとって拘束力あるあの誠めが発せられているのである。⁽¹¹⁾

「あなたがたは、こう祈りなさい」というマタイ6章9節の要求の背景にあるのは、すべての福音書で強調されている事実、即ち、イエス自身が神に、しかもご自身の父である神に祈ったという事実である。それは、ルカ3章21節の重要な指示によれば、イエスがヨルダンで民全体の中のひとりとして洗礼を受けたときであり、マルコ1章35節によれば狭いところから広い場所へと出発するとき、即ち、カファルナウムから自余のガリラヤ全土での宣教に赴く直前のことであり、ルカ6章12節によれば、12人の召命の直前のことであり、マタイ14章23節によれば、5千人の食事と弟子たちの危険に曝された航海（教会）との狭間でのことであり、ルカ9章18によれば、弟子たちに向けられたあの問い、「人々は、私のことを何者と言っているか」のすぐ直前ルカ9章29節によれば、山上でのイエスの変貌の行為の渦中のことであり、マタイ26章36以下によれば、ゲッセマネでイエスが受難の道に踏み入れるその折のことであり、「彼は祈っていた」という覚え書きによって際立った仕方では刻まれているのは、明らかに、決まって、彼の歴史のそのときどきの重要な転換点なのである。イエスの祈りにおいて、特にゲッセマネにおけるその祈りにおいて、明らかにヘブル書の著者は、イエスの生の新しい真の大祭司としての彼の性格にとって、まさに決定的な活動そのものを見たのであった。「彼はその肉の日々において諸々の祈りと嘆願とを…ご自分の死から救い出すことのできる方に捧げた」と（ヘブル5：7）。そして、「父よ！」というのは、イエスが神に身を向ける際の呼びかけである。また、70人の弟子たちが派遣され、帰還したとき（ルカ10章10以下、マタイ11章25以下）、イエスはこう祈られた。「あなたを讃め称えます。父よ、天地の主よ、あなたが御国の力を智者や賢者に隠し、それを幼子に顕してくださいました。父よ、あなたの御前でこうして起こっていることは、あなたの御心にかなっていることです」と。ゲッセマネの祈りのとき、ルカ22章42節では、「父よ！」と、マタイ26章39、42節では、「わが父よ！」と、マルコ14章36節では、もしかするとパウロがガラテヤ4章6節およびローマ8章15節で依拠していたかもしれない伝承に基づいて「アッパ、父よ！」と祈られている。ルカ23章34では、「父よ、彼らをお赦しください。彼らは自分たちが何をしているのか、わかっていないからです」と、また、46節では「父よ、あなたの両の御手にわたしの霊をゆだねます」と祈られている。そして、ヨハネによる福音書11章41節では、ラザロを死から呼び覚ます（Erwechung）前に「父よ、わたしの祈りを聴き届けてくださったことを感謝します」と、また12章27節以下では、受難の出来事が始まるときに、「わたしは何と言うべきか、父よ、わたしをこの時から救い出してください。しかし、このために、わたしはこの時の中へやって来たのだ。父よ、あなたの御名の栄光を現わしてください」と祈られている。そして、ヨハネ17章のいわゆる大祭司の祈りでは「父よ、……あなたの子の栄光を現してください。子があなたの栄光を現すために」と（1節）。「聖なる父よ、彼らを、あなたの御名のもとに守ってください」（11節）と。「父よ、あなたがわたしに与えてくださった者たちもまた、わたしのいるところに、わたしのもとにおらせてください」（24節）と。「義し

い父よ、この世はあなたを知りませんが、わたしはあなたを知っています。そして、この者たちは、あなたがわたしをお遣わしになったことを知っています」(25節)と祈っている。

以上のことから学ぶことは、福音書によれば、イエスはただ祈られただけでなく、父なる神への呼びかけにおいて、弟子たちに先立ち、拘束力のあるものとされたのである。そして、マタイ6章9節の「あなたがたは、こう祈りなさい」は、マタイ28章19節の洗礼命令が、ヨルダンでのイエスご自身が受けた洗礼に対する関係と同じであるとバルトは言う。⁽¹²⁾

「あなたがたは、こう祈りなさい」というイエスの命令は、キリスト者の思惟と言葉における「父よ!」という呼びかけを根拠づけ、同時に、この神の性質と存在に関する彼らの認識を根拠づけているのである。この命令は、イエス・キリストにおいて成就された神と人間との間の契約の誠めである。「わが父よ!」という事実に基づいて、「あなたがたの」、そして「われらの父よ!」と呼びかけることができるのである。それは、イエス・キリストにおきて生起した契約の成就とは、神と他のすべての人間に代わって唯一人の人間とが、父および子として互いに認識し確証し愛し合っている限りにおいて一つでということだからである。御子はその父の意思を完全に光の中へともたらし、父は御子の業を完全に光の中へもたらす。このことは、キリスト降誕以前には、ヤハウェとイスラエルの関係においては起こらなかったことである。

「神がわたしたちの父である」ということは、「神はまずイエス・キリストの父である」という事実からだけ絶対に帰結し、この事実には絶対的に依存している。そして、神を父として呼び求める我々の自由は、全くあの呼びかけに根拠を持っているのである。神を「父」と語りかけるなどということを、人にはどうしてできるのであろうか。この問いの正しい答えの持つ秘儀は、マタイ11章27節以下で明らかとなる。「すべてのことがわたしに、わたしの父から手渡されている。そして、子を知る者父のほかにはなく、父を知る者は、子と子が啓き示したいと思う者のほかにはだれもない」。だから「わたしのもとに来なさい」。あなたがた労多く重荷を負っているすべての者よ」。だから、「あなたがた、わたしの軛を負い、わたしから学びなさい」。だから、「あなたがたはこのように祈りなさい」(マタイ6章9節)。

このことは、ヨハネ福音書の使信のひとつの基調音である。ここでも「父」という語はただイエスご自身の言葉の中にだけ現れる。5章18節では、ユダヤ人たちは、「神は自分の父だとイエスが言っている」と非難している。13章3節では、「父がすべてのものをご自分の手にお与えになったことをイエスは知っていた」と記している。14章8節ではピリポが、「主よ、わたしたちに父を示してください」とイエスに言っている。そして、最後に、復活の朝、マグダラのマリヤに向かって、「わたしの兄弟たちのところへ行こう言いなさい。『わたしはわたしの父のところ、わたしの神のところへ行く』と。(20章12節) 決定的なことは、「父」と呼ばれている方は、「御子」の父として、即ち、イエスの父として表示されていることである。かくして、イエスを見る者は父を見るのである(14章9節)。「わたしを通らなければ、だれも父のもとへ行くことはできない」(14章6節)。⁽¹³⁾

最後に、神を父として呼び求めるというキリスト者の従順な呼びかけの意味は、一体何なのであろうか。いかなる仕方でも(inwiefern) イエスを見る者は父を見るのか。いかなる仕方でもイエスはこの神に至る通路を啓くのであろうか。それは、「神は父だ」という内容の命令を伝達することによってではない。そうではなく、イエス・キリストの存在・人格・業即ち、彼の歴史・彼の語りかけ・行動・苦難の全体である。彼の最初から最後に至るまでの歴史とは、神の意思への完全に従順なる服従の歴史、神の意思の遂行の歴史である。以上が、あの福音的な命令「あなたがたはこのように祈りなさい」の根拠としての力を持っている福音的・キリスト論的・福音的命令法の意味であるとバルトは言う。⁽¹⁴⁾

注

- (1) K.バルト『キリスト的生』〔I〕 天野 有訳(新教出版社)1998年 p.105
- (2) 前掲書 p.107
- (3) 前掲書 p.108
- (4) 前掲書 p.110
- (5) 前掲書 p.113
- (6) 前掲書 p.118
- (7) 前掲書 p.121
- (8) 前掲書 p.125
- (9) 前掲書 p.131
- (10) 前掲書 p.134
- (11) 前掲書 p.138
- (12) 前掲書 p.140
- (13) 前掲書 p.144
- (14) 前掲書 p.148

三. 神の子ら

バルトはこれまで、キリスト者によって「よびかけられる神」即ち、父に関する問いを中心に論じてきた。次に、呼びかけにおいて行動している主体の問題に向かってゆかねばならないという。そして、「父よ!」と呼びかけることは、若干の少数に限られた「預言者」(キリスト教徒)の事柄である。このような状況において、神を自分の父として呼び求めることが、キリスト者の規定である。「きみたちはこのように祈りなさい」、これが「主の祈り」である。⁽¹⁾

主の祈りの伝承は、若干の「預言者的少数において存在する」人々の存在を考慮に入れているとバルトは言う。そこで呼びかけられている父は、マタイ6章9節では「わたしたちの父」と表示されている。この複数一人称は、最後の三つの祈願に現れている。これは単に弟子たちだけでなく、他の多くの人々についても前提されているのである。それゆえ、神を父として呼び求める者たちがそのようなことを行うのは、或る闘いの状況下においてである。即ち、多くの人々が味方ではなく敵対的という意味である。そのような状況下において、「父」と呼び求めるのである。

「父よ!」という語りかけは、非常に家族的で信頼に満ちた親密な性格を持った語りかけである。誰でもが、この語りかけを使うことができるわけではない。だとすれば、神に向かって「父」と言う者たちは、自分たちはその方の子らだと思っているからである。では、どのようにして彼らは、そういう状態に到達するのだろうか。「神は神である。だが、彼らは人間である。神は創造主である。だが、彼らはその被造物である。神は天におられる。だが、彼らは地上にいる(伝道の書5:1)」という〈無限の質的差異〉(キルケゴールの言葉)の深淵に注目するとき、どのようにして、彼らは神の子らなのか。そのとき、どのようにして神に自分たちの父と呼びかけることができるのであろうか。また、「神の子としての本性(Gotteskindschaft)」というような一般概念に基づいて人間の権利を主張すべきものがあるのだろうか。そのような権利が仮に存在するとしても、とっくの昔に無効となり喪われてしまった権利であるかもしれないのである。キリスト者は、神と自分の関係において、決して特別に誠実(true)な人々ではなく、また、周囲の人間との関係においても、決して立派な人々でもなければ、喜ばしい注目を集めるような人間でもない。キリスト者が神の子らであるのは、次のことを知っており告白するからである。即ち、「神の子と呼ばれ、神の子であること、神を父として呼び求めることが許されているということ、そのことを人間によって証明されるべきであるような何らかの価値などは全く役に立たないこと」などである。彼らこそが、神殿内のあの取税人と一緒に、「神様、罪人のわたしを憐れんでください」(ルカ

18:13)と告白するのであり、あの失われた息子と一緒に、「父よ、わたしはあなたの子と呼ばれる資格はありません」(ルカ15:21)と告白するのである。彼らは、自分にそのような権限が与えられているなどと思いあがることなしに、「父よ!」と呼ぶことがゆるされるのである。

それは、全く神の自由な恵みの業および賜物である。恵みとは、人間にとっては思惟しえないもの、行為しえないもの、それゆえ近づきえないもの、到達しえないもの、把握しえないものである。恵みとは、人間の側の協力なしに、人間の業績に抗しつつ、人間の倒錯と罪責を覆い包む神の慈愛のことである。恵みとは、ご自分の主権のためになされた人間のもとへの神の介入であり、それゆえ、人間のためになされた憐れみに満ちた神の介入のことである。恵みとは、神の自由な父としての共存(väterliches Zusammensein)のことである。⁽²⁾

もし、キリスト者が、神の子らと呼ばれ神の子らであるとすれば、人間によってなされるような何らかの価値などは、全く役に立たないことを知っているならば、これこそが、神の恵みについての彼らの認識と告白である。しかし、自分たちの父として神に呼びかけることへと人間を解放し、彼らにその権利と力を与える恵みとは一体何であろうか。バルトは、それは、あの契約の歴史において人間に起こっている出来事であるという。⁽³⁾この契約は、神と人間との間に神ご自身によって立てられたということのみならず、むしろ、人間がこの契約への自発的で自由で行動的な参与へと呼び寄せられ動かされることによって、人間に起こっている出来事についての歴史である。この契約の歴史とは、一人ひとりの人間の生の歴史を包み込み統合するあの歴史、即ち、イエス・キリストの歴史である。この歴史において、神の恵みは顕れている。神の恵みは、神的愛の生命と支配である。この具体性は、聖霊の分与・交流である。人は、彼ら自身の歴史を支配し規定するイエス・キリストの歴史の生き生きした認識へと、聖霊の光で照らされ自覚され目覚めさせられることによって、神の子らとなるのである。即ち、イエス・キリストの誕生・その言葉と業における奉仕と死は、彼らのために起こったのだという認識によって神の子らとなるのである。ガラテヤ3章26節「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。」および使徒信条の「我は、父なる神の独り子、我らの主なるイエス・キリストを信ず」ということができるのである。人は、信仰によって神の子らとなり、神の子らということができる。

御子を通して神は、今や、終末時(Endzeit)の開始に際して、わたしたちに語られたのであり、この御子を通して世界を創造された後に、万物の相続者と定められた。神ご自身の栄光の輝き、神の本質の似姿である御子が、多くの子らの救いの導き手として栄光に導いたのである。「というのは、多くの子らを栄光へと導くために、彼らの救いの創造者を数々の苦しみを通して完全な者とされたのは、万物の目標であり源である方に、相応しいことであったからです」(ヘブライ2章10節以下)。イエスは、彼らを兄弟と呼ぶことを恥じなかったのであり、彼らと同じ者になられ彼らと共に苦難と試練に曝されるという必然性に服されたのである。どのような意図のためなのか。それは、彼らに対して憐れみ深い者となるためであり、神に仕えることにおいて忠実な大祭司として民の諸々の罪を贖うためであった。(ヘブライ2章17節)。それは、どのような根拠に基づいてであろうか。それは、ロマ書8章29節にはっきりと書かれている。「神は、ご自身が選ばれた人間たちを、ご自身の子(イエス)のかたちと同じ姿(Gleichgestalt)における存在へと定められた」と。

ガラテヤ4章4節以下では、パウロは同一の事態を逆方向の視線において語った。「時が満ちる」と、時間と歴史全体の成就が、到来したとき、神はご自身の子を、すなわち、ひとりのイスラエル人(彼は女から生まれ、律法のもとに服した)を世に遣わされた。それは、我々が「子たる身分」を受け取るためである。神はご自身の子の霊をわれわれの心の中へと派遣され、そこで「アッパ父よ」と呼ぶためである。

最後に、必ずしも確実とは言えないが、「神の子ら」と呼ばれるべきあの「平和を創りだす者たち」への祝福の言葉(マタイ5章9節)そのものも同じ方向を指し示しているということである。平和とは、人間相互のあらゆるいざこざ、喧嘩、戦争の単なる反対物ではない。「平和」は、使徒の挨拶では常に

「恵み」と並立され、また、「恵み」の果実の表示として用いられている。この「平和」という概念は、メシアの顕現と共に到来するイエス・キリストにおいて完成された神とこの世の和解（救い）という概念と同じ意味で用いられている。従って「平和」とは、ルカ2章14節でよく知られているように、「いと高きところにおける神の栄光へ」の地上的対応である。また、「平和」（平安）は、復活のイエスがご自分の者たちに挨拶する言葉でもある。（ルカ24章36節）。「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイ5章9節）。⁽⁴⁾

このようにして、「人間が神の子らとなり神の子らである」という不可能なことが可能となり現実となる。ここでバルトは、キリスト者の実存と実在の在り方をめぐる問いについて、幾つかの説明的確認をしておきたいという。

- ① まず、キリスト者が今日あるのは、恵みである（コリント一15：10）。恵みは、神の自由な慈愛という測りがたく意のままにならない秘儀と奇跡である。生ける神の恵みとして、恵みは力を持つのであってそれ以外ではない。この自由なる恵みにおいてのみキリスト者は生きるものであり、この恵みにおいて父は、ご自分の者たちを繰り返し愛し、ご自分の子らと呼ぶことを喜ばれるのである。キリスト者が神を父として持ち、神の子らであることが許されているということは、人間関係のあらゆる関係とは異なって、進行しつつある歴史の事柄である。歴史的事柄とは、イエス・キリストの出来事のことにはほかならない。イエス・キリストにおいて、義とされ聖とされ召されており、裁かれかつ恩赦を与えられ、死なされかつ生かされているのである。

ヨハネの手紙一3章2節によれば、「わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません」と記されている。今は、ただ、イエス・キリストにおいて与えられている約束に依り頼むことによって神の子らである。しかし、「あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」（コロサイ章4節）。そのときまで、キリスト者は彼への信仰によってのみ歩むのであって、観ること（Schauen）、即ち、彼の神の子としての姿（Gottessohnschaft）を直接認識し把握して歩むのではない。（コリント二5章7節）。そのとき迄、キリスト者は、決してすでに捕らえてしまっではおらず、決して完成されてはいない。（ピリピ3章12節以下）。ただ、「キリスト・イエスによって捕らえられている」。これが、キリスト者の実存である。この事実に基づいてキリスト者は、全身の力を尽くしつつ、かつ後ろを振り返り観ることなく、目標に向かって走ることができるだけである。⁽⁵⁾

- ② 神の恵みによって、イエス・キリストがキリスト者の兄弟となったゆえに、神を自分たちの父として呼び求める自由を持つ者たちは、未熟な者、未経験な者、成人していない者として、それゆえ、幼子として意外の仕方と神に出会うことはありえない。「われらの父よ」という呼びかけは、あらゆる段階とあらゆる姿において、いつもただ、ずぶの初心者の行為である。どれほど成熟した姿であろうとも、初心者の行為にすぎない。というのは、そこで「善きもの」と思い込まれている一切のものは、ここではただ「悪しきこと」でしかあり得ないのである。キリスト者の振る舞いは、世間では習得した技術が「やり手」であり「名人」であっても、しかし、どんなに年季を積んだ百戦練磨の戦士であろうとも、「キリスト者・神の子」とすることにおいては、「やり手・名人」であることは金輪際不可能である。キリスト者が「やり手」や「名人」として生きているとするならば、そのとき彼らは神の恵みによって生きていないのである。

父への呼びかけは、自分の有能さや自己救助の術を応用してではなく、きわめて小さく、弱く貧しい子らの業としてである。それは、勝手気儘に父の家から迷い出て異境と豚の群れに落ち込んでしまい、そこから我にかえって、父の家を思い起し、そこから、もし許されるなら、己れの父のも

とへ引き返すことを願っている悪しき子らの業としてである。己れを偉大で強くて富んでいて、その上愛すべき善良な神の子とみなし、あの取税人や罪人と同じ食卓につくの拒むような者は、キリスト者ではない。⁽⁶⁾

- ③ 父なる神への呼びかけの主体は、神の独り子ではなく子ら(キリスト者)である。個々のキリスト者は、ただ己れの責任においてのみ個人的な従順を果しうる。しかし、それは、私人 (Privatperson) として行うのではない。人には、隣人 (Mitmensch) が本質的に属しているのと同様、神の子供にはその兄弟が本質的に属しているのである。そこにいるのは一人の他者だけではなく、多くの者たちなのであり、この彼らなくしては、彼はキリスト者ではありえないのである。「我らの父よ」というのが、彼に命じられている内容である。例え、彼が孤独の中にあるとしてもである。神が唯一のイエス・キリストの父であるかぎり、イエス・キリストを信じるすべての者たちの共通の父であり、すべての者たちはこの父の子らとして互いの間でもまた兄弟たちなのである。⁽⁷⁾ まさに、唯一の神が父として人間と交わりを持つために歩みだしたあの垂直線に、この神に呼びかけることを許されている水平線は、対応しているのである。彼らは、「われらの父よ」と呼びかけるために自分たちに与えられている自由を持っている共同体 (Gemeinde)・民である。この神の民、個々人は、他の兄弟に対しても責任を持つ存在である。なぜなら、彼らは最も近い隣人だからである。

もちろん、兄弟たちの考えや行動が皆同じなどということはない。兄弟たちから離れることもある。誰もが、誰とも兄弟として一緒に行動できるというわけにはいかない。誰が神の子なのか、誰が兄弟なのか、そうではないのか、に関する知の権限は、人間にはない。

兄弟だと思われた者たちが偽りの兄弟ということが起こりうるならば、逆のことも起こる。即ち、死んでいた兄弟 (ルカ15:32) が「再び」生きるようになり、失われていた兄弟が再び見出されるようになることが起こるのである。また、兄弟などとは思ってもいなかった人が、突然、兄弟としてたち現れることだって起こるのである。⁽⁸⁾

新約聖書は、「兄弟」という概念については、控え目である。それは、「神の子ら」という概念もただちにすべての人間に適用したわけではない、という事情と同じである。「神の子ら」と「兄弟たち」とは、新約聖書の用法においては、人間となった神の子であり「多くの兄弟たちの中の長子」(ロマ8:29)であるイエス・キリストへの信仰において一つであり、イエス・キリストへの信仰告白において出会い、互いに認識し合う人々のことである。旧約聖書においても「兄弟」は、契約の民の一員として、イスラエル人のことで用いている。(出エジプト2:11)。「兄弟」は、空虚な場所ではなく、一貫して教会の肢体として相共に集っている者たちに関してのみに語られているのである。「キリストがその弱い者のために死なれた兄弟として」(コリントⅠ8:11、ロマ14:15)。「弱い者」とは、漠然とした隣人ではなく、「一人の同朋のキリスト者、キリストへの信仰において結び会わされた民の一員なのである。兄弟とは、キリスト者以外のすべての人間のことでなく、「神によって愛されているがゆえに兄弟として語りかけられている」キリスト者のことである。それは、教会自身のためではない。「かくして、世は、わたしたちがあなたの弟子であることを知るであろう」ということのためである。愛における結合が、他の人たちへの教会の証しの奉仕の前提なのである。この狭さ(兄弟愛)からのみ、あの広さ(この世)への展望は拓かれうるのである。⁽⁹⁾

註

(1) K.Barth『キリスト教的生』Ⅰ 天野 有訳(新教出版社 1998年) p.151

(2) 前掲書 p.157

(3) 前掲書 p.162

- (4) 前掲書 p.170
- (5) 前掲書 p.174
- (6) 前掲書 p.176
- (7) 前掲書 p.182
- (7) 前掲書 p.185
- (8) 前掲書 p.188

四. 呼びかけ (Die Anrufung)

キリスト教的生とは、即ち、イエス・キリストにおいて生起した神と世の和解の認識において生きるべき生とは、出来事、歴史、行動であるとバルトはまず述べる。神が「われらの父」であられ、我々が「神の子ら」であることが真実であるのは、我々が、父に子らとして呼びかけることによって、父の業と言葉に応答するときである。呼びかけとは、一般的に言えば、子供が父に自分のことを想起させ、気づかせる運動のことである。当然のことであるが、父は自分が誰であり、彼は誰なのか思い起こされる必要はない。「女が自分の胎の子を憐れまないなどということがあろうか。たとえ彼女が忘れようとも、わたしがあなたを忘れることはない。」(イザヤ49:15~16)「イスラエルの子らが呼びかけるより先に、わたしは応えよう」(イザヤ65:24)。だが、子らは、「この方はどなたであり、自分たちは何者なのか」ということを思い起こす必要があるのである。子らは、いつも忘却の淵から起きて目覚めていなければならない。父に呼びかけるということは、「自分は此処にいる」と父に訴えることであり、父を実の父として真剣に受け止め告白することであり、自分自身を実の子として真剣に告白することである。父なる神は、ご自身の生ける子らの生ける父である。それゆえ、この父が子らに関して、子らのために欲しておられることは、この父と子らとの間の歴史であり、生ける交わりと関わりである。子らがこのような生ける交わりを自分たちの側で受け入れ育て、この父と自分たちとの共同性をこの歴史において実現し、父の「父たること」(Vaterschaft)と自分たちの「子たること」(Kindschaft)を言葉と行為で表わすことが、「われを呼べ」と命じる事柄である。父と呼びかけることは、あの失われた息子(ルカ15章)がしたように、「起き上がって出発し、父の子供として、この父に向かう道を歩み出し、この父に信頼をもって語りかけ、そして父に聴き届けられることを求める」ということを意味している。それゆえ、呼びかけという行為は、固定化し停滞もしくは凍結してしまった関係を新たにすること、むしろ、活動的なものを目指すのである。子らの側には、停滞、休止、という悪しき現実性がいつも付きまとっているのである。だが、父が子らに、父としての働きを中止することは、決してない。

しかし、神の子らは人間である。人間として、この父に対して感謝という負債を負っている存在である。感謝の理由は次の2点にある。①人間という被造物として、人間としての仕方、諸々優れた特性をもって、この父を認識し愛し呼び求めるという規定を与えられていることに対する感謝。②この父がその御子の派遣、行為、啓示において、彼らをご自分の子供として所有し、彼らに語りかけるということに対する感謝。③この父が、彼らの語りかけと告白を聴き取ることへの感謝である。感謝とは、ある他者の自由な贈り物を承認するということである。そうであれば、神の子らは、この贈り物の贈り主である彼らの父に誉れを帰すこと(Ehrung)、即ち、この父を誇ること、この父への賛美、讃め称えとならざるをえないのである。⁽¹⁾

この点で注目すべきは、「感謝すること」(Danken)と「讃め称えること」(Preisen)が旧約聖書の詩編の語法では明らかに類縁関係にあり、それゆえ両者は大抵の場合対概念をなしている。即ち、「感謝」は必然的に「讃め称え」へと移行しており、「讃め称え」は単に強められた「感謝」にすぎないように見える。両概念はイスラエルの神の存在と行為に負っているあの「呼びかけ」の書き換えであるが、「感謝」は通常「讃め称え」に先立っており、「感謝」は正しい真剣な礼拝の行為である。(詩編107編)

新約聖書のパウロの用法は、「感謝すること」は諸教会の存在と善い状態に対するものであるが、そこから批判的な事柄へと移行していくのが常である。しかし、パウロの手紙は、導入の挨拶で、先ず「感謝」を述べ、つづいて「讃め称え」が次にくるのである。(コリント一1章1節以下)。神を「讃美する」とは、「神は、神として誉れを帰せられ呼びかけられるに相応しい方である」ということを告白し、目に見え耳に聞こえることを意味する。「感謝」と「讃美」というこの二つの概念の抽象的分離は、見ることはできない。相対的な区別にすぎないのである。

神への讃美 (Lob) において示されるのは、まず第一に、神の恩恵 (Wohltat) に対する感謝が隠され沈黙されたままではありえず、むしろ、外へ、公共の場へ、告白へと向かわずにはおれないということである。第二に、神への讃美において示されるのは、神への呼びかけには、既に受け取られており、なお待ち望まれるべき神の贈りものへの感謝である。神への呼びかけは、神の「恩恵」に対する感謝であり、神の「恩恵行為」(Wohltun) に対する感謝となり、ついには「恩恵行為者」(Wohltäter) としての神への感謝となる。「感謝」は、「讃め称え」となるのである。父への呼びかけにおいてこの転換が起こっているかどうか、ということが神の子らの自由なる人間性の試金石である。例えば、『主の祈り』の最初の三つの祈願では、感謝において「父に誉れを帰すこと」だけが重要なのである。⁽²⁾

かくして、神への呼びかけ、感謝と讃美は、祈りのうちにある。だが、神殿でのパリサイ祈り「ファリサイ人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、私はほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します』」(ルカ18章9節以下) のような奇妙な祈りや、エルサレムにいる者たちの虚しい口先だけの讃美「主は言われた。『この民は、口でわたしに近づき、唇でわたしを敬うが、心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを畏れ敬うとしても、それは人間の戒めを覚え込んだからだ』」(イザヤ29章13節) という感謝と讃美の誤解も起こる。

「感謝」「讃美」祈願は、「父なる神への呼びかけ」として、キリスト者の生活の根源形態、基本形態である。⁽³⁾ この呼びかけが生起することは、不思議な出来事であるが、その業は、聖霊によるのである。聖霊は、父と子との永遠に生きる一体性 (Einssein) における神ご自身である。聖霊において神は、人間を目覚めさせ、根源的励ましを与え、力を当たられる。聖霊において神は、ご自身を「弁護者」となれるのである。⁽⁴⁾

バルトは、最後に三つの説明でこの項を閉じる。

- ① キリスト教的生とは、霊的生活 (geistliches Leben) である。それは、聖霊の業における神の特別な運動と行為によって決定され規定されている生活のことである。即ち、「父なる神への呼びかけ」として、絶えず繰り返す単純に、聖霊を求める祈りを本質とする生である。キリスト者の根本特徴を素描するとバルトは言う。
- (イ) キリスト者とは、自分自身からではなく、彼らに自由な仕方与えられる聖霊によって動かされつつ、神ご自身に直接無媒介に直面させられている人間のことである。キリスト者はこの神の被造物にすぎない。しかも、役立たずの、神に反逆する被造物にすぎない。キリスト者は、教会において生き生存している。もし、彼らがそのことをしないとしたり、もし、彼らが神の民に属することをしないなら、彼らはキリスト者ではないだろう。キリスト者は、キリストにある父祖兄弟たちを持っており、彼らの証言を聴く。キリスト者は、彼らの証言を担い継承してゆくという教会の委託を遂行するための共同責任を自覚している。このように、キリスト者には、「神を自分たちの父として呼び求めよ」と、そのような自由へと、聖霊は彼らを解放する。そのような自由において、彼らは己れの霊的生活を生きる。
- (ロ) キリスト者が、直接無媒介的に神と対面し、あの自由の中へと移されているのを見出すのは、唯一の仲保者イエス・キリストの歴史・業・言葉である。キリスト者が他の人々から区別される

のは、「彼らには、イエスを信じ彼を愛し彼に希望を抱き彼により頼み彼の御名において神に呼びかけることが許されている」という点においてである。キリスト者にとっては、神は何らかの超越という霧の中ではなく、それゆえ、彼ら自身の判断や思惟や思弁に基づいてでもなく、彼らによって構想されたイメージの形姿においてでもなく、彼ら自身の理性や力ではなく、イエス・キリストにおいて神であられることによって、彼らは、神を自分の意のままにしようとする高慢から守られているのである。「聖霊においてでなければ、誰もイエスを主として呼ぶことはできないのである。」(Iコリント12:3)

(ハ) 霊的生活とは、父なる神と子なる神に関係づけられ、聖霊なる神に全体的に依り頼む生である。それゆえ、自分自身の内に根拠を持ったり自分自身の力によって維持され更新される生ではなく、ただこの神によってのみ絶えず新たに保証される生である。これはキリスト者の困窮である。キリスト者とは、「肉に信頼を置く」(ピリピ3:3)一切の理由が取り去られてしまった人たちのことである。キリスト者とは、ただ「ヤコブの神と救い」のみを見つめ、この神に感謝しこの神を讃美し、最大のものから最小のものに至るまで一切のものにただこの神から待ち望み、乞い求めること。このような「幸いなる困窮」における生が、彼らの霊的生活である。

(二) 「神への呼びかけ」におけるキリスト者の霊的生活は、単に瞬間の事柄ではなく、彼らの生涯の歴史の事柄である。彼らは、日毎に新たに悪しき仕方での霊的生活の断絶が脅かされている。しかし、父の恵みとその独り子と聖霊の力強い約束と交わりがキリスト教的生の連続性を守るのである。その霊的生活を過ごす過程で、眠り込むこと、つまづくこと、行き詰まること、迷い道に入り込むことは、あのゲッセマネであの弟子たちのように、最良のキリスト者といえども、ありうることである。だが、イスラエルを見守る方は、眠ることなくまどろむこともない(詩編121:4)。その方の霊は思いのままに吹く(ヨハネ3:8)とは次のことを意味している。その方の霊は、明るい山々の上ばかりではなく、キリスト者が時折そこにいる暗い谷間や穴ぐらの中にも吹くのである。キリスト者としての彼らの生活には、別の守り主を持っていないのである。

このようにして、彼らの生涯の歴史は、多くの問題性と脆さの中にありながらも、彼らの霊的生活となるのである。⁽⁵⁾

② 神を父として呼び求めるというキリスト者の自由、この自由において生きる彼らの霊的生活、そして、この霊的生活の推進と展開における生活全体は、彼らの個人的な事柄ではあるが、私的な事柄ではない。キリスト者各個人が、多くの兄弟たちの一人として、神を「われらの」父と呼び求めるかぎり、それは、個々のキリスト者の私的な救いと私的な至福の事柄ではないのである。それゆえ、キリスト教会は、個々のメンバーの私的な諸用件を共同で保護促進するための組織でもない。キリスト者は、世のうちにいるのである。イエスは、「かれらが世から取り去られますように」とは願わない(ヨハネ福音書17:11)。キリスト者の「父なる神への呼びかけ」は、或るどこかの「至福な者たちの島」の上で起こるのではなく、他のすべての人々と同じ条件のもとに、キリスト者も生きているのである。キリスト者は、優越的で、超然として、傍観者として、嘲笑する第三者として生きるものではない。イエス・キリストご自身は、優越的で超然とした栄光に浸りながら己れ自身のために世に到来したのではなかった。また、復活と昇天においても、世からの隠遁の中へ引き返したのではなかった。全く逆である。そうではなく、世のために、父の右に座しつつ、全権を委ねられた神の大使として行動されたのである。⁽⁶⁾

しかし、今や、「イエス・キリストは、イスラエルの王および教会の主として、世の救い主である」ということが決定的となったのである。この証言を世のただ中で響き渡らせるために、キリスト者は派遣されており、義務づけられており、力と顕現を付与されており、そして選び出されているのである。そのことが、世間や社会に承認されたり評価されたりしないが、それは重要なことで

はない。キリスト者は、マタイ5章13節では独自の役割を失うことのない「地の塩」と呼ばれている。また、マタイ5章15節では意味深いことに「ともし火」と呼ばれている。パウロはロマ書1章14節では、キリスト者は異教世界全体に「責任を負っている者」と特徴づけた。キリスト者は、非キリスト者に責任を負っている者なのである。⁽⁷⁾

- ③ 以上述べてきた神の子らへの「呼びかけ」は、神と人間との契約の歴史の不可欠な要素である。即ち、この「呼びかけ」は、神がイエス・キリストにおいて、聖霊の特別な運動と行為において、絶えず行われる交わりの不可欠な要素である。この「呼びかけ」は、契約の歴史、交わりの主体的契機および要素なのである。神と人間との特別な交わり、両者の出会いの歴史もまた存在し、神と人間との具体的な関わりと交流も存在し、それゆえ、両者の生き生きとした関係の事実は、徹頭徹尾神の自由な恵みに負っているのである。神をイエス・キリストの父として呼び求める行動に向かう力と意思は、自由な恵みによるのである。従って、神の自由な恵みによって、「アッパ、父よ」(マルコ14:36、ロマ8:15)との呼びかけは、キリスト教的エートス「Ethos」(倫理的決断と行動)の根源的行為(Grundakt)となり、神は彼らのパートナーにされるのである。そして、神は呼び求める者たちに対応して聞き届ける(Erhörung)のである。

従って、神は語りかけるだけではなく、キリスト者の方からも語りかけるのを欲しておられるのである。神の主権とは、独裁専制的・抽象的主権ではなくて、イエス・キリストにおいて人間に向けられている神の自由な恵みの、現実開放する神の聖霊具体的主権のことである。キリスト者が父と呼びかけるとき、それは、いかなる意味においても、何らかの冒険・空に向かったの懇願・目的のない旅ではありえず、何らかの実験や賭事などではない。神への「呼びかけ」は、まさにあの歴史に参与するパートナーなのである。彼らの呼びかけは、聞き届けられるという無条件の期待以外の何ものでもない。真の神への呼びかけは、自分自身をイエス・キリストにおいて神の子らとして認識することを許されている行為なのである。カルヴァンは、『ジュネーヴ教会信仰問答』で「われわれはイエス・キリストの唇によって祈るがごとくに祈る」は、このような地盤で述べているのである。

キリスト者のこの確信は、神に対する人間的思い上がりではない。人間が思い上がったとしても神は、支配権を持っておられるのは、確かなことなのである。父なる神の「聞き届け」の本質は、人間が理解しているよりもはるかに無限により良く彼らを理解しておられるのである「わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることがおできになる方に」(エペソ3:20)。父なる神がキリスト者の「呼びかけ」を聞き届けられるのは、彼らの賢さからではなく、むしろ彼らの愚かさの中と無力さにおいてである。⁽⁸⁾

バルトは、「天にましますわれらの父よ」との呼びかけに依拠して試みたこの「主の祈り」の最初の思惟行程の最終地点に達したと述べて、これまでの内容を総括する。

この呼びかけ(Invokation)においてそこから取り出される規範によって測るならば、次のように言うことができる。即ち、キリスト教的には善きことであり、許され命じられている人間的行動である。キリスト教会とキリスト者は、彼らの思惟・発言・行動がこの呼びかけという運動のうちにあるそのときに、従順なのである。

個別的には、次のように言わねばならない。①感謝という形態。この感謝を捧げることを彼らは神に負っており、またそれを喜んで行う備えがある。②神の贈り物・神の贈り与える行為・自由なる贈り主である神への讃美という形態として。③祈るという形態として示すこと。このことが彼らの従順なのである。

さらに次のように言わねばならない。キリスト教会とキリスト者の思惟・発言・行動が、①霊的生活

という活動および展開であるとき、彼らは従順なのである。②彼らは、この霊的生活を、神への奉仕において、周囲の世全体に対する神の業と言葉の証言のために生き、そのような仕方で自分自身の救いのためにも生きることが許されているのである。

最後に、次のように言わねばならない。キリスト者の呼びかけが、聞き届けへの無条件の確信において生起するそのときに、彼らは従順なのであると。この「呼びかけ」は、キリスト教倫理の課題である。この解明は、善悪の判断の基準だとバルトは言う。⁽⁹⁾

註

- (1) K.Barth 『Das christliche Leben』 I 天野 有訳 p.192
- (2) 前掲書 p.194
- (3) 前掲書 p.197
- (4) 前掲書 p.200
- (5) 前掲書 p.210
- (6) 前掲書 p.215
- (7) 前掲書 p.219
- (8) 前掲書 p.243
- (9) 前掲書 p.245

五. 神の誉れを求める熱心

1. 大いなる情熱

キリスト者とは、ある特定の情熱 (Leidenschaft) を持っている人間のことである。それゆえ、キリスト者とは、いかなる場合であれ、卑屈な者、陰険な者、退屈している者、因習に捕らわれた自主性のない者ではありえない。キリスト者の情熱は、文字通り、燃え上がり、時には、非常に声高く表現することがあるだろう。だがキリスト者の情熱は、静かな情熱、深く隠された情熱、落ち着いた情熱である。情熱というものは、一人の人間の、或る満たされない願望 (Begehren) のもとでの苦しみのことである。願望が成就すると、苦しみは楽しみと喜びに変わる。キリスト者とは、願望の成就を追い求める人間のことでありバルトは言う。

だが、キリスト者の持っている情熱は、或る特別の情熱である。キリスト者の情熱は、神の業と言葉の行動的認識と証言のための、彼らの選びと召命に関連しているのである。とは言え、キリスト者も、他の人と同じ人間として、様々な関連においても生きている。即ち、衣食住への願望、様々な享楽、所有、名声の願望、精神的願望、政治的願望、社会的願望、美的願望、学問的願望である。そのような願望と情熱を悪しき低次元で価値の劣った情熱のように語るとしたら、それは浅はかというものであるとバルトは言う。⁽¹⁾ そのような情熱はすべて、人間の神によって選ばれ欲せられた善きものたる被造物の本姓に関連しているのである。にもかかわらず、キリスト者は、特別の情熱を持っている。それが、「神の誉れを求める熱心」 (Eifer um die Ehre Gottes) なのである。

「御名を崇めさせ給え」 (Geheiligt werde dein Name) という主の祈りの第一祈願を通して、今、キリスト教倫理学の展開を目指しているのだとバルトは言う。この第一祈願は、キリスト者が、父に身を向けることが許されているあの「呼びかけ」の第一の内容的要素である。この「呼びかけ」は、感謝と讃美の「呼びかけ」ではあるが、決定的には、一つの祈願・嘆願なのである。

ところで、第一の祈願において問題となるのは、「神の誉れ」である。それは、「御名を崇めさせたまえ」 (Geheiligt werde dein Name) とは、神の御名の聖化のことである。即ち、神の御名に相応しく、ご

自身の業と言に相応しい誉れが、その偉大さと栄光において啓示されますようにという祈願を真剣に祈り求めるのである。「われらの父よ」というという祈願には、これを真剣に神の前に捧げる者たちに迫ってくる或る人間的態度 (Haltung) と行動様式 (Handlungsweise) が含まれている。この態度と行動様式は、彼らの存在、生活、行為にとって特徴的なものである。キリスト者の固有の情熱とは、この態度と行動様式のことである。即ち、キリスト者の情熱とは、神の誉れに関わることである。「神の御名が聖とされますように」という第一祈願は、神の御名に相応しい仕方、神ご自身の業と言に相応しく、その偉大さと栄光において啓示されますようにと祈る。この熱き願望によって、キリスト者は、満たされ促され導かれ支配されている。もしそうでないとしたなら、どうしてキリスト者が第一祈願を真剣に祈り求めているなどと言えようか。キリスト者のこの情熱を「熱心」(Eifer) という聖書の概念を用い、バルトは、「神の誉れを求める熱心」と名付けるのである。⁽²⁾

2. 知られかつ知られざる神

主の祈りの対象である神は、ご自身の隠れのうちにありつつ、不在の神ではなく、臨在の神であり、秘められた神ではなく、むしろ顕わな神である。それゆえ神は、名の無き神ではなく、名を持たれる方である。このように、神は二面性を持っている。それゆえに、キリスト者は、「父よ、ただあなただけがなしうることをなしてください」と祈るのである。即ち、「あなたの御名が、その聖性において冒瀝されることがなく、至るところで、全ての者によって、聖とされるように。」と祈る。このように、神に呼びかけることによって、キリスト者は、同時に自分の方でも、その人間的視野と能力の領域内で、神の誉れを求めて、熱心でなければならない。ここで問題となっているのは、三重 (非キリスト教世界・キリスト教会・キリスト者) の同心円である。バルトは、これの一つ一つ具体的に取り上げる。

- ① 先ず、初めに、外側の円から内側の円へ、即ち、世界 (die Welt) について取り上げる。その全体像における被造世界 (Schöpfung) の状態である。我々が、神を、天地の全能なる創造主として認識し告白するとき、神の誉れは自然界 (外円) でも無限に大いなるものであることを信じないわけにはいかない。しかし、祈りの対象は、宇宙の事柄ではなく、人間がコントロールできる人間の世界である。教会史とキリスト者個人の生活史は、世界史のただ中で、世界史と共に生起する。世界史は、自然史でもある。しかし、世界史は、能力を所有している人間のなす努力、企図、行為の歴史として自然史から区別される。従って、世界史は、世界経済、世界文化、多様な形態における権力、多様な世界観、世界宗教、世界戦争、世界平和を内包している。世界史は、大小様々な領域において、この世の子らによって担われ、管理され、動機づけられる歴史である。非キリスト教的世界と神との関係は、秩序づけられた関係ではなく、無秩序、無規範の関係である。しかし、教会とキリスト者も、過ちを犯したのは、この世よりも重大な仕方、罪を犯したのである。エドム人やモアブ人、エジプトやアッシリアやバビロンも罪をおかした。しかし、旧約聖書の見解によれば、イスラエルおよびイスラエル人たちが、彼ら異邦人とは違って、選ばれ、召し出された神の民であったことによって、彼らよりもはるかに重大な仕方、罪を犯したのである。

ところで、神がこの世によく知られているのは、キリスト教会とキリスト者の証言と宣教の奉仕によるのである。しかし、神によって人間が認識されることと人間が神を認識することの二様の事柄が、イエス・キリストの歴史の出来事である。このイエス・キリストの歴史という唯一の一点において、神の御名は、世の側から、聖とされているのである。⁽³⁾ イエス・キリストの歴史は、この世のただ中で、この唯一の一点において、神はご自身を世に知らせたのである。そして、イエス・キリストが死者たちの中から復活され、彼の歴史が過去のものとならなかったゆえに、神はこの世に絶えず知られる神となられたのである。

しかし、「世に知られていない」事態を注視しないなどということがあってはならない。この事態は、悪魔、悪霊、罪、一言で言えば、「虚無的なもの」同様、固有の力、意味、威厳を持っていない。これらを所有しているように見えるときには、ただちに、イエス・キリストによって廃棄されているということを、熟慮されねばならない。「神が世の知られていない」事態の諸形態は次のようなことである。

- (イ) 最も原初的な形態は、理論的無神論 (der theoretische Atheismus) である。この理論の本質は、神は存在する (Es gibt einen Gott) という命題を否定するという点にある。無神論は、古代に既に存在していた。「神はない」と言っている愚か者は、詩編14：1と53：2でも既に語られている。バルトは、「Es gibt」という哲学者の非人称主語Esによって構成された慣用句を手がかりに無神論者の「神存在」の問題を論じる。(この問題についてバルトは『das Nichtige』においてM.ハアイデッガーおよびJ.P.サルトルにおいて論じている。)

無神論は、次のような神については当てはまるかもしれない。即ち、それ (Es) が、存在すると仮定して、様々な仕方でその存在を与える (gibt) 必要な神である。しかし、真の生ける神は、神ご自身を与えることによって存在 (Sein) するのである。だが、無神論は宗教という形態をとってもあらわれる。それを一言で証言すれば、イスラエルにとってその周囲の世界を特徴づけている耐え難い「偶像崇拜」である。バルトは、このような形態を「神の私物化」(die Nostrifikation Gottes) の試みと呼ぶ。⁽⁴⁾ 世は、理論的無神論と諸宗教の偶像崇拜によって神を私物化しているのである。

このことによって、神の聖性を冒瀆している人間は、自分の隣人 (Mitmensch) をも知らないものである。隣人を認めない (ver kennen) という点によって、神に関する人間の無知 (Verkenning) は頂点に達し、その本性を顕すのである。「自分が隣人を認めない」とは、人間は、ただ自分自身のみを主体として、自分自身の勝手な選択と処置機能によって、隣人を無視して彼の傍らを通りすぎてしまうのである。⁽⁵⁾

- ② 教会 (Kirche) における、「神が知られており、同時に知られていない事態」と「神の御名の聖性とその冒瀆」について取り上げる。教会も世に、世界史として存在している。しかし、教会は世に対して、批判的な関係を持っている。教会は、世のただ中であって、神の民、神の聖所 (Heiligtum) なのである。

まず、教会は、自らも世に存在していることによって、世全体に妥当することに参与しているのである。その理由は、人間の善性と教会が自らに委託された証言の聴き手であり、イエス・キリストにおける神の自己告知によるのである。だが、神の自己告知が世に示されているにもかかわらず、世の態度は依然として不明瞭である。神の自己告知を受け入れたのが、教会である。教会は、神の自己告知に基づいて生きる民である。教会は、イエス・キリストの神の然りを聴き、彼の人間的然りを復唱することによって生きるのである。

新約聖書において教会は、自らの根源に由来し、自らの目的に向かい自らの本質に基づいて語りかけている。神の教会は、「真理の言葉によって生み出され」(ヤコブ1：18)、「それゆえ、怒りの裁きへではなく、救いの実現へと定められている」(テサロニケI 5：9)。教会は「神の霊が住まれる神の宮」(コリントI 3：16)であり、「キリストのからだ」であり(コリントI 12：27)であり、「キリストは教会を愛してご自身を教会のために捧げた」(エペソ5：15)、「あなたがたは世の光である」(マタイ5：14)。以上の言葉は、何の留保も無く、断言的に言われている。

にもかかわらず、教会は、生ける主に従順でない生き方が起こるのである。

主イエス・キリスト否認の形態

(イ) 過剰における教会] 否認と離反墮落の一つの形態は、過剰における教会 (die Kirche im Exzess)、即ち、増長し膨れ上がり思い上がっている教会である。

ここで、プロテスタントの人は、ローマ・カトリック教会のことを思い浮かぶかもしれない。だが、直視すべきことは、カトリック教会だけでなく、東方正教会、ルター派、バプテスト派の人々に至るまで存在しているのである。過剰における教会の問題点は、生ける方は教会の統治者 (Souverän) であられるのに、その方を飛び越えてしまっていることである。このような教会は、御言葉の被造物であらうとは欲せず、あの方に仕える教会とせず、むしろ、あの方から任命された権限を授けられたということを盾にとって支配する教会となっているのである。

(ロ) [不足における教会 (die Kirche im Defekt)] 自己の事柄に関して半分しか確信を持っていないために、自分自身を真剣に受け止めることのできない教会のことである。

この教会の特徴は、世に対するイエス・キリストの教会としての基礎づけ、保持を持って与えられた規定に対して不信実なことである。教会の主は、死に支配されているこの世に勝利され、この世と和解された方である。教会は、その勝利の主に視線を注ぐならば、本来勇気づけられるにちがいないのに、実際は勇気を持っていない。なるほど、この教会は使徒信条の「三日目に死人のうちより甦り、天に昇り、父なる神の右に座したまえり」と朗誦する。だが、この教会は、まったき信頼ではなく、半分だけの信頼を持って語るだけである。

この教会について、バルトはマタイ14:25によって説明する。嵐で荒れている湖上の舟にイエスは近づいてくる。舟中の弟子たちは、イエスを見ているのであるが、あたかも幽霊でも見るように怖がるのである。主は、「勇気を出しなさい」「恐れるな」と大声で呼びかけ、ペテロに「わたしのところに來なさい」との招きに従うのだが、彼は再び風と波を見てしまう。しかし、幸いなことに、「主よ、わたしを助けてください」という。⁽⁶⁾

- ③ 神は、世と教会におけると同様、キリスト者個人の生活においても、知られかつ知られざる方なのである。人は皆、義人であり同時に罪人である。なぜ義人なのか。それは、イエス・キリストは、個々のキリスト者のために、神とその和解のためにも死なれ、仲保者として生きており、彼のためにも神を代理としておられるからである。以上のことは、各人に客観的に語られた神の然りである。かくして、キリスト者は神の前で客観的な義 (Gerechtigkeit) であり、聖化 (Heiligung) であることができ、キリスト者でありつづけることができるのである。一人の人間をキリスト者とするのは、聖霊の力においてその人間に特別に語られるイエス・キリストの言葉によってキリスト者とされるのである。その人間は、生けるイエス・キリストの教会の一つの肢へと召され、そのことによってキリスト者とされるのである。一言で言えば、キリスト者は、キリストにおいて存在するのである。

「罪人にして同時に義人」

キリスト者は、世に堅く立っている。しかし、キリスト者は、「神に関する知」に反して悪しき思念を思い巡らし、悪しき言葉を語り、悪しき行為をなしていることは、キリスト者の生活における大いなるスキャンダルなのである。キリスト者は、父・子・聖霊なる神に信仰を告白すると同時に、この悪しき思念・言葉・行為という罪をもなしているのである。

新約聖書によれば、すべてのキリスト者が、致命的な過ちを犯しているわけではない。すべての弟子が、ユダのようにイエスを裏切ったわけではなく、ペテロのようにイエスを否認したわけでも、つぶやいていたわけではない。また、アナニアとサツピラ (使徒言行録5:1) のようにしたわけではない。だが、イエスが裏切りを予告したとき、すべての弟子が「主よ、それは私のことですか」(マタ

イ26：22)とあたかもユダのように、思わず発してしまった。同様に、ゲッセマネの園では、すべての弟子たちが目覚めているべき時に寝てしまった。(マタイ26：36) キリスト者は、以上のような様相、即ち、矛盾状況と浮遊状態、分裂状態の姿を呈しているのである。それは、「神に関する知」と「神に関する無知」との競合関係における姿である。⁽⁷⁾もし、キリスト者がこの事態を率直に白状しないならば、そのとき神の御名の誉を冒瀆するという「升目を満たす」(マタイ23：32)ことになるであろう。

3. 御名を崇めさせ給え

キリスト者が分裂状況と矛盾状態のただ中から、あの父なる神への「御名を崇めさせたまえ」という祈りが沸き起こる。主の祈りの第一祈願の内容と意味は、総括的に言えば次のようである。「どうか、あなたが、この悪行と悲慘を引き受けてくださいますように。あなたが、光と闇とのあの忌まわしい分裂状況を打ち砕き、この世界から徹底的に取り除いてくださいますように」ということである。この祈りこそが、「知られかつ知られざる神」というあの領域のただ中での徹底的に新しいものである。「アッパ、父よ」(ロマ8：15、ガラテヤ4：6)という呼びかけが、ここでは、「父よ、あの領域全体をかくも恥知らずなほどに支配し性格づけている『もまた』(und)を一掃し、これを終結させてください」という具体的内容を獲得することが、あの領域での新しきものである。「父よ、どうかあなたの御顔の光を輝かせてください」。以上のことを、主の祈りの第一祈願は意味しているのである。

このような祈りをもって神に呼びかけるのは、教会であり、そして教会のうちにあるキリスト者である。彼らがこれを行うのは、自分の必要もしくは衝動からではない。彼らがこのような祈りをもって神に呼びかけるのは、彼らに課せられている責任においてである。

イエスが弟子たちに「御名を崇めさせ給え」と祈ることを教えられたとき、弟子たちの無知がいかなるものであれ、祈ることを許しておられるのである。神が弟子たちにとって「隠された神」でしかないならば、どうして祈ることができようか。イエスが、教会とキリスト者に「このように祈りなさい」と要求されたこと自体、既に「福音」なのであるとバルトは言う。⁽⁸⁾キリスト者は依然として光と闇との均衡の中に生きているにもかかわらず、自由が約束されているのである。このことは、周囲の人々に対しても、明るい光を投げかけているのである。それは決して小さいことではない。

主の祈りの第一祈願「御名を崇めさせ給え」(Dein Name werde geheiligt)は、次のような意味である。崇める「ドイツ語は聖化(Heiligung)である」とは、聖書で言えば、或る物がその周囲の世界の世俗性から取り出されて、神への奉仕のために、(直接には神への祭祀、礼拝のために)捧げられることを意味する。聖化とは、ある人物、ある場所、ある事物が、この目的のために、「選り分けられること」(Aussonderung)、「用いられるべく要求されること」(Inanspruchnahme)、「差し押さえられること」(Beschlagnahme)、「整えられ仕上げられること」(Zubereitung)を意味する。「御名を崇めさせ給え(御名が聖とされますように)」という祈りは、「主よ、粉碎し打ち砕き滅ぼし給え、闇のあらゆる権力を、これを裁きのもとに服せし給え、勝利をわれらに確信せしめ給え、諸々の罪の塵芥からわれらを起こし給え、虻の輩を投げ捨て給え、真の自由をわれらに見出さしめ給え、父の家にある自由を」というG.Arnoldの讃美歌「ああ、あらゆる縄目を打ち破り給う方よ」を意味している。「御名を崇めさせ給え」とは、別言すれば、ヨハネ福音書12章28節の「父よ、あなたの御名の栄光を現してください」、即ち、「栄光を現す」ということである。

さて、「御名を崇めさせ給え」には、完了形(Perfekt)と未来形(Futurum)が含まれていた。

「御名を崇めさせ給え」とは、その御名がイエス・キリストにおいて既に完全に聖とされている(ist)のである。いつかされる(werden)ように、という中心に現在われわれは位置している。新約聖書で証言されているイエス・キリストの歴史において、われわれは、事実、神ご自身による一回的、完結的な御名の聖化の行為における「光の、闇に対する既に成し遂げられた完全な勝利」と関わっているのだ

る。イエス・キリストの歴史は、既に神のあらゆる道の終局、既に終末 (das Eschaton) そのものであったし、今もそうである。それは、イエス・キリストの業において既に生起した出来事として、イエス・キリストの言葉、死者たちの中から復活した方の「平安があなたたちと共にあるように」(ルカ24:36、ヨハネ20:19、21、26)を通して、我々に顕わされているからである。「神の御名の栄光を顕す」ために生起しなければならなかった出来事は、かつてイエス・キリストの歴史において成し遂げられた。しかも完全かつ最終的に成し遂げられたのである。「かつて当時」、成し遂げられなかったとしたら、その場合、イエス・キリストは「今日」生ける方として我々の間にはおられない、ということになるだろう。

この祈りを要求される方は、「わが名の栄光を再び現すであろう」(ヨハネ12:28)という約束のもとで、その祈願の将来における成就を仰ぎ見ているのである。そのときには、丁度、復活の日におけるご自身の再臨の開始のときに、最初の弟子たちに対してそのような方となったごとくに、すべての者によって、すべての事物において、目で見られ触れられる(ヨハネI 1:1)べき勝利者として、再び到来し、再び現れますようにと。この意味において、ルターと共にこう言おう。「わたしたちを助け給え、天にいます愛する父よ」。⁽⁹⁾

4. 神の言葉の優位

バルトは、「祈ることの法則は行動することの法則である」とこの項で述べることから開始する。「御名が崇められますように」という呼びかけは、キリスト者の服従の行動なのである。即ち、「神に祈り求めよ」という命令に対する、彼ら自身の応答の行動なのである。

彼らに命じられているのは、あの大いなる最後の日、あの永遠の日に対する憧憬を抱きつつ、神に全面的に身を向けることである。もし、そうでないなら、彼らの祈りは、従順の行動ではない。その場合には、彼らは何を祈り求めているかを知らずして祈っていることになるのである。それ故に、主の祈りの第一祈願を祈る者たちの態度と行動様式を特徴づけるものとして、「神の誉れを求める熱心」を本節のタイトルとしたのであるとバルトは言う。⁽¹⁰⁾ 第一祈願を祈り求めよという命令に内包されている戒めは、神の誉れを求める「熱心」を要求しているのである。

第一祈願について、宗教改革者たちの理解によれば、神が我々の業と言葉、我々の生活と教説を通して、神の誉れと讃美に至るというのが、この祈願の目標であり、成就であった。これに対してバルトは、この理解に対して否を唱える。第一祈願は、現在または将来における何らかの人間の意志とか行動に注目しているのではなく、むしろ現在と将来の人間の可能性を越えたイエスの顕現の時の目標に注目しているのである。即ち、イエスの人格と歴史において既に生起したあの「神の御名の栄光化」の普遍的な意味と力と射程の啓示における時の目標に注目しているのであると。

今や、キリスト論的・終末論的な関連で第一祈願の倫理的重要性を論じなければならないとバルトは言う。⁽¹¹⁾ この関連は、ある一定の境界設定と不純物化を必然とする。それは、我々から要求されていること、我々自身が調達しなければならないことは、我々の人間的場所と人間的在り方においてのみ、我々の人間的権限と可能性の限界内においてのみなされるのである。「あなたの御名を崇めさせ給え」と祈ることをいかなる意味で適切かつ必要かつ必要な事柄と見做しうるのであるか。この祈りをすることによって、キリスト者は神と等しい者になることではない。我々は、自分の分 (das Unsrige) を行うことを欲すべきなのである。同様の警告は、「御名を崇めさせ給え」という祈願の終末的性格からも考えさせられる。「アーメン、主よ、来てください」(黙示録22:20)という呻きを自分自身の手で聴き届けようとして、この祈願を無意味にしてしまうなどということを彼のすべきことではない。「自分たちは、ただ、主の到来を仰ぎ望むこの祈りの線上でのみ、言葉と行為とをもって自分たちの分をなしうるのだ」ということを忘れてはならない。イエスの「わたしはすぐに来る」(黙示録22:20)について人が

なしうるのは、せいぜい祈ることであろう。我々キリスト者に求められているのは、「神の誉れを求める熱心」である。この世で、依然として我々は浮遊状態の支配体制に支配されている。

このような状況に対して、キリスト者は神の言葉の優位を、確証しなければならないのである。このことを行うことによって、彼らに命じられているあの「神の誉れを求める熱心」は自己証明され正しく作用し、その実が示される。この点で、彼らの行為は神の行為に似たものであり、我々の抵抗は神に並行して進んでおり、地味でつましいがしかし明瞭な類比物なのである。彼らが、その選択、意思、行動において、神の言葉に相応しい優位を保持し帰するならば、神に服従しているのである。キリスト教的生とは、主の祈りの第一祈願で理解するならば、優先秩序 (überordnung) および従属秩序 (Unterordnung) における生のことである。この秩序に敬意を払いこの秩序に従うことによって、キリスト教的生は、あの浮遊状態の支配体制下にありつつ、人間的生とは異なる生であり、独自のありかたにおいて、約束に満ちたものとなるのである。⁽¹²⁾

この項における「神の言葉」とは、「生けるイエス・キリストの言葉」のことを意味している。神はこのイエス・キリストにおいて、世・教会・キリスト者に、その聖霊の力をもって御自分を啓示し、今も絶えず知らせているからである。キリスト者とは、この言葉がその者のもとに到着し、その結果、彼自身がこの言葉を告白せざるをえなくなった人間のことである。彼らは、この言葉を耳にし、聴き取り、理解したのでその確証として洗礼を受けたのである。「彼らは神の言葉を既に聴いたのである」。彼らは神の言葉に応答することを開始したのである。

神の言葉がキリスト者に告げられていることによって、彼らには、同時に次のことも告げられている。「彼の意識の要因には、他のあらゆる要因に相対して神の言葉の優位が相応しい」と。「キリスト者の生活においては、これら他のあらゆる諸要因に相対して、彼らによって聴き取られた神の言葉にこそあの優位は相応しい」のである。何故か。キリスト者が既に聴いた神の言葉は、彼の生活を規定するあらゆる諸要因のただ中であって、ただ一つ一義的に明瞭に働き、語りかけてくる要因だからである。神の言葉は、イエス・キリストについての言として、即ち、薄暗い現在のただ中で、イエス・キリストの十字架の死において完全な仕方で行った神の行為についての使信として死者たちの中から復活した方の言として終わりなき平和の約束である。

「神の言葉の優位」これは、キリスト教的生の秩序を特徴づける言葉としてはかなり控え目な表現なのである。今や、キリスト者は「肉に従う生」ではなく、「霊に従う」(ローマ8:4)のものとして生きる「新しい生」が問題とするなら、あまりにも控え目すぎるのである。「優位」ではなく、むしろ、「支配」について、支配のもとへと「従属」されていると語らねばならない。キリスト者の歩みのすべては、ただ暫定的・相対的な意味と射程を持ちうるにすぎない。それ故、キリスト教的ヘラクレスになろうと欲するなどということは、許されない。キリスト者は、神の勝利を後追い遂行することも先取りすることもできない。彼は、神の勝利に、「鏡に映し出された像」として仕えることができるだけである。

キリスト者とは、依然として分裂と薄暗がりの領域の中に、しかし他方また、既に神の御名によってかつて生起した聖化についての言の聴き手として存在しているがゆえに、自分がチャレンジを受けていると自覚して旅立つ者なのである。キリスト者とは、「知られかつ知られざる神」で確認したように、三重の同心円の内部に同時に存在している。次に、三重の同心円各々について、個別に取り上げる。

- ① 最初に、円の内側から、つまり、個々のキリスト者の個人的生活から開始する。その理由は、「すべてのキリスト者は、自分の魂の救いのために何をなすべきか」という問いが、もっとも重要だからではない。そうではなく、キリスト者の内面的・外面的生活の領域において、神に対して従順な態度をとっているかどうか問われるからである。

キリスト者は、一方で神の選びと召し、他方では神あたかも知られない者でもあるように関わるという矛盾のうちに生きている。それは「義人にして同時に罪人」という矛盾である。キリスト者

は、「御名を崇めさせ給え」と祈る自由と戒めが与えられている。それと共に、この祈りに対応する神の誉れを求める熱心へと呼び求められているのである。キリスト者は、神との平和を見出すことによって自分自身との平和を持つことができる。そしてキリスト者は、神に義を帰し、自分自身不義を帰すことによって神との平和を見出すことができるのである。このことによって、彼は福音を証言することができる。⁽¹³⁾

- ② 「神を求める熱心」は、キリスト者個人に止まってはならない。キリスト者は、教会において存在しているのである。もし、彼が、教会において存在していないならば、キリスト者ではないだろう。キリスト者というのは、キリスト教に関心を抱いているというのではなく、生ける教会(Gemeinde)の生ける一つの肢へと召し出されているのである。教会の証言こそが、最高の切迫さをもって、キリスト者に委託されている証言である。この神の民の一員として、キリスト者は、「御名を崇めさせ給え」と祈ることが許され、要請されているのである。教会もキリスト者個人と同様に、分裂と矛盾の姿に直面する。そこにおいてキリスト者は、個人の生活だけではなく、教会の一員として「神の誉れを求める熱心」の責任を果たさねばならないのである。

- ③ キリスト者は最後に、この世(Welt)の子、市民である。彼も、一般大衆に世間に属しており、世の人々と連帯しているのである。教会の一員としての彼の存在は、神認識を欠いている世に対しての奉仕でしかありえない。このことを忘れるならば、彼の祈りは、いかにも、みすばらしいものになってしまうのである。自分自身のためではなく、教会のためでもなく、世にあって光となるために、彼は、キリスト者なのであり、神の民の一員なのである。

この世から区別した方法として二つの道がある。一つは、原理的修道院制度(Mönchstum)の道である。ここでのキリスト者は、世の様々な傾向、習慣、生活様式、例えば、財産、性的生活から距離を置く。もう一つの道は、原理的十字軍騎士(Kreuzrittertum)の道である。ここでキリスト者は、孤独であれ他者と共にであれ、戦闘的な行動へと向かうことによって、自分の異質性、世から区別すべき自分の立場を明らかなものとし、自分の証言をするのである。原理的修道士と原理的十字軍騎士という、この相互にきわめて近い類縁関係にある二つの姿は、排除さるべきただひとつの極端である。キリスト者は、修道士にも十字軍騎士にもなろうとしてはならないのである。キリスト者の行為は、証人だから、世に対して距離を置いたり、世に対して戦闘的になることは不可能なのである。

キリスト者が証言するとは、他のすべての世俗人(Weltmenssch)のただ中で、この言葉を他のあらゆる言葉とは相違したものとして聴き取った一世俗人、即ち、この言葉の威厳と権威と威厳を認識した世俗人として考え行動することである。キリスト者は、他の世俗人に対して、きわめて注意を引く仕方、流されぬ者(nonkonformist)、神の誉れを求めて熱心な者として自分を示すであろうし、またきわめて注目に値する仕方、彼が守り指示しなければならない証し人として、自分を示すのである。⁽¹⁴⁾

注

- (1) Karl Barth 『Das christliche Leben』天野有訳Ⅱ(新教出版社1998年) p.250
 (2) 前掲書 p.254
 (3) 前掲書 p.281
 (4) 前掲書 p.296
 (5) 前掲書 p.299
 (6) 前掲書 p.316

- (7) 前掲書 p.350
- (8) 前掲書 p.358
- (9) 前掲書 p.389
- (10) 前掲書 p.391
- (11) 前掲書 p.393
- (12) 前掲書 p.406
- (13) 前掲書 p.434
- (14) 前掲書 p.470

六. 人間の義を求める闘い

キリスト者は神に次のように祈る。「神が、ご自身の義を、新しい地の上と、新しい天の下に現われ住まれるように」と。そのように祈り求めることによって、キリスト者は、この祈りに相応しく、「人間の義の支配」に対して、即ち、「地上での人間の法、人間の自由、平和、人間の手による諸々の保護の維持と更新、深化、拡張」に対して責任を負う者として行動する。

1. 無秩序に対する蜂起

「神の誉れを求める熱心」の真正性は吟味を必要とする。祈りは人間の行為であるゆえに、限界がある。それは、その祈りが真正な従順な行為なのかどうか吟味せねばならない。バルトは、この行為を「人間の義を求める闘い」と呼ぶのである。⁽¹⁾「神の誉れを求める熱心」は、これがただちにあの「人間の義を求める闘い」に伴われる場合にのみ、善き服従による行為であり、前途有望な行為なのである。

キリスト者は、神の戒めによって「神の誉れを求める熱心」へと呼びかけられていると同様、或る特定の蜂起 (Aufstand) へ、特定の闘いに入ってゆくように呼びかけられている。その背後には、「ヤコブ・イスラエル〈神と闘う者〉」(創世記32:24以下) という物語がある。新約聖書の書簡では「闘い」という概念は通常「信仰」という概念と結合して現れ、キリスト教的実存及びキリスト教的証言を内部からも外部からも脅かす試練との対決を包括的に表示するものである。パウロと教会は、この闘いを絶えず目前に見据えており、闘いは彼らに定められているのである。(ヘブル12:1) この闘いを耐え抜くための前提はエペソ6:11以下に記されているように、「神の武具」で身を固めることである。信実に関することは、「善き闘い」となる。(Iテモテ6:12、IIテモテ4:7)。重要なことは、「悪魔の狡猾な策略に抗して踏みとどまること」(エペソ6:11)である。そのための信仰とは、神の言と霊によって呼び覚まされた自発的、人間的行動のことである。

抵抗 (Auflehnung) と蜂起 (Aufstand) は、或る特定の単なる拒絶より以上のことである。艱難、不安、迫害、飢え、裸、危険、剣に襲われることは、勿論些細なことではない。それらが、キリストへの愛から引き離すことはできない。(ロマ8:35)。それらは、将来啓示される栄光に比べればなにものでもない(ロマ8:18)。なぜなら、それらは、忍耐を強め、練達を深め、希望に新しく息吹を与えるからである。それ故、「あなた方は、悪を持って悪に、侮辱の言葉をもって侮辱に報復してはならない」(Iペテロ3:9、Iテサロニケ5:15)と言われている。「愛する者たちよ。あなたがたは自ら復讐することなく、むしろ、神の怒りに任せなさい。あなたは悪に負けてはならない。かえって善を通して悪に打ち克ちなさい」(ロマ12:19以下)。「剣を取る者は、剣によって滅びる」(マタイ26:5)。

しかし、キリスト者にとって不可避な闘い、むしろ命じられている蜂起というものがある。キリスト者が、創造主なる神によって自分に与えられている「への自由」というものを、自分自身のためにではなく、むしろ「自分の生を、神への奉仕において、神への奉仕に備えるべく活動的に働かせる」という目的のために用いるためである。しかしながら、キリスト者も他のすべての同じく人間であるゆえに、彼らに固有な蜂起、闘いの何らかの完璧な純粋などというものは無いのである。16世紀のフランスの新教徒

たちも、当時の数々の「宗教戦争」へと鼓舞されたわけではなかったのである。人間の間で敵対するというキリスト教的戦線が起こったときには、また、教派との戦闘的な対決のために徒党を組んだときには、さらに、十字軍遠征に出立したときには、いつも不正なこととして起こりえたのである。彼らは、そのとき、自分たちに指示が与えられているあの蜂起と闘いを止めてしまったのである。敵一味方関係という図式の中での思念、発言、行動、即ち、他のグループを不利な状況に陥れるつつ特定のグループの利益のためになされる行動は、キリスト者の意図とはなりえない。彼らは、キリスト者として、一人ひとりの人間の友なのである。⁽²⁾

ところで、キリスト者は、自分自身も他のすべての人々もある困窮 (Not) の中にいるのを見ている。キリスト者はこの困窮を、人類の困窮 (Menschheitsnot) と見做し理解している。この人類の困窮に抗して闘いを開始すること。これがキリスト者に命じられていることである。しかし、この人類の困窮は、何らかの神の摂理の威厳や正当性を持っているものではない。この困窮は、神の意思に対応しておらず、神の意思に反逆している。神の意思を知っている人間 (キリスト者) は、この困窮を不変の所与として受け入れることはできない。キリスト者は、この困窮に対して抵抗し蜂起し闘いを開始するよう呼びかけられている。もし、闘わない「キリストの兵士」、「闘う教会」ではないとしたら、彼らはキリスト教徒ではなく、キリスト教会ではないだろう。

この人類共通の困窮とは、あらゆる人間関係、社会的諸状況と諸関係を内的・外的に支配し毒し混乱させる無秩序のことである。秩序とは、人間が神と共に生きるという服従としての共生 (Zusammenleben) の形態のことである。無秩序とは、この秩序を黙殺し侵犯することである。それ故、この無秩序は、人間の困窮でありつつ人間の罪責なのである。人間は、神を侮辱し、人間相互の間でも互いに侮辱し合い、互いに正しく関わりあうことができず、互いに自由を与えることができず、互いに平和の内に生きることができない。神のごとくなろうと欲するアダムとカインの罪と共に、兄弟殺しのカインの罪は既に含まれているのである。この「アダムとカインの罪」という二重の歴史の確証と反復が、まさに世界史である。すべての人間が神に敵対しているところでは、人間は人間にとって狼とならざるをえず、何の益にもならぬ闘い、相手を辱めるような闘い、汚れた闘い、禍を惹き起こす生存競争が始まるのである。このような無秩序に抵抗するようキリスト者が命じられているのは、彼らは神の義の宣言をその耳に聴き、この宣言において、この宣言と共に人間に与えられている法の秩序・自由の秩序・平和の秩序の宣言を聴き、それ故、人間的な義の可能性と必然性を眼前に見据えていることによってである。

あの無秩序に対するキリスト者の蜂起の決定的な行為は、主の祈りの第二祈願における神への呼びかけ、「御国を来たらせ給え」である。「神の国 (マタイでは天国)」とは、人類を裁きかつ起こす神の義の、神ご自身によって天から望まれかつ突如として起こる (hereinbrechen) べき普遍的、決定的啓示であり、人間の社会的諸状況および諸関係のただ中での神の完全の支配の幕開けであり、かくして神の癒しに満ちた人間の生と共生との秩序の樹立である。神の国とは、人間存在の正常化という行為における神ご自身のことであり、人間を支配している無秩序の勝利に満ちた克服における神ご自身のことであり、「神の国が、そのような行為における神ご自身が、顕われ天から地上に到来しますよう」。キリスト者は、このために祈る自由を持っている。このように祈ることが、キリスト者に命じられている無秩序に対する蜂起である。⁽³⁾

2. 主無き諸権力

ここで、先ず、バルトは悪の性質と本性 (Natur) について説明しなければならないという。この悪の除去こそ主の祈りの中で祈り求める。この悪こそ、蜂起し闘わねばならない敵である。この敵対者を無秩序と名づけた。それは、神の秩序と神の義に逆らう人間の不義であった。この不義が、人類を責め苛み混乱させ荒廃させ困窮させた。この悪についてさらに、厳密に語らなければならない。

人間の、神からの離反墮落 (Abfall) と自己疎外 (Entfremdung von Gott) が、すべての悪の根であり、あの無秩序の究極的、本来的根拠である。また、人間の神からの離反墮落と自己疎外がまさに根源的無秩序であり、人間の生と共生を暗闇と化し重く煩わせる本来的不義なのである。しかし、神からの自己疎外は、直ちに、自己自身からの自己疎外 (Selbstentfremdung) を内に含んでいる。人間の自己自身からの自己疎外とは、自分の存在の人間性の変質墮落 (Denaturierung) のことである。変質墮落とは、人間が神の所有であり神を自分の主として持っているという規定に矛盾対立することによって主無しに (herrenlos) になるゆえ、勝手気儘に (meisterlos) 考え行動することである。このような行動が「神は神である」という事態を変えることはできない。人間は、神から逃れることはできないのである。「わたしが天に昇ってもあなたはそこに在し、陰府にわが床を設けても、見よ、あなたはそこにおられる」(詩編139:8)。もし、神無き仕方考え、行動するならば、人間にとって破局的な帰結を持つのである。破局的な帰結とは何か。

それは、神無き考え方は、「神のようになる」(創世記3:5)、即ち、自分自身が主となると言うことは、太古の昔から、掴み取ると思い込んでいた約束であった。しかし、この約束が成就されたことは一度もなかったものであり、今後もありえないであろう。人間が支配権を持ち、自律しており、成人している (mündig) と見做し自称する人間は、その人の神話であり幻想にすぎないのである。⁽⁴⁾

主無き諸権力は、われわれの眼前に存在している。しかし、その存在は、明瞭な仕方ではない。そこで、主無き諸権力の幾つかを挙げ、その本質と活動を手短に説明することにする。

- ① 新約聖書には、神の「国」という概念が、政治的絶対主義の種々様々な形態を考えるという事を指し示している。初代のキリスト教会は、権力者の態度や行為の背後や頭上に、また、国家体制の背後と頭上に、この政治的絶対主義が徘徊しているのを見ていた。初代教会にも、あらゆる政治の内に働いている魔性、悪霊的力が問題なのである。

国家制度とは、人間相互間の法 (Recht) の形成および行使を意味するのみならず、統治と支配の形成を意味する。その法の行使のゆえに、権力と物理的力との行使を意味するのである。もし、権力が法から切り離されるならば、そのようなことは、神から開放する人間はするものだが、そのときには、政治的魔性、悪霊的力が成立するのである。こうなると、法は、人間を助け、その生を守り開放し、人間の生活に平和をもたらす秩序ではなくなる。もはや、人間は国家に奉仕しなければならない。政治的魔性・悪霊の力は、帝国主義 (Imperium) という非人間的理念を本質とするのである。この力は、君主制の理念でもあり得るし貴族制の理念、民主主義の理念、社会主義の理念でもあり得るのである。⁽⁵⁾

- ② 主無き諸権力の別の形態は、マモンである。この語の起源は不明である。この語は、神話化して語りつつ、決して非現実的ではなく、人間の物質的資産、所有、財産についての偶像と活発な悪霊の一つとなっているのである。財産は、生計を保証し確保するための力である。マモンは、マタイ6:24とルカ16:13で、神と競合する第二の主として現われ、こう記されている。「人は神と同時にマモンに、愛・忠誠・奉仕を捧げることはできない」と。マモンの宝は、「虫に食われ、錆びつき押入れに入れられ、盗まれることもある」(マタイ6:9)。

「マモン」とは、貨幣という概念と結合している。貨幣とは、算術的に見渡しえる経済的力のことである。人は、貨幣を所有している限り、それだけ価値ある者である。貨幣は、経済的価値のみならず、すべての人間的諸価値の一つの主要な総体であり、尺度である。貨幣は、柔軟かつ強力な武器である。貨幣は、多種多様な意見、確信を根拠づけ、同時に他の確信を抑圧することのできる残酷な道具である。この道具は、ある時は景気を上昇させ、ある時は景気を下降させる。ある時は平和に奉仕し、ある時は冷たい戦争を遂行し、ある時は恐慌を食い止め、ある時はこれを引起す。⁽⁶⁾

③ 主無き諸権力の第三は、精神的形成物 (die geistigen Gebilde) である。通常イデオロギーと呼ばれるものである。そこにあるのは、人間の能力である。能力とは、自分自身の内的生と自分の仲間たちの生と自分の外部世界全体とが人間に意識される直感 (Anschauung) を概念 (Begrif) という形態において把握するという能力のことである。だがもし、人間の能力と精神の力を用いているのが神から離反墮落した人間であるとするならば、事態はどうなるのだろうか。そこでは、人間の精神は、自由な精神であることを止めてしまう停滞状態が生じるのである。彼の仮説は、定説となり、探求し問い研究してその定説の背後まで遡っていかうとする勇気を持たなくなる。彼の理念 (イデアール) は、そのとき彼の偶像 (イドル) となる。⁽⁷⁾

④ 精神的諸力だけではなく、それらとは区別される地上的なもの (das Chthonische) という概念で包括しうる諸力も存在する。聖書には、人間は、人間にとって不可見で処理不可能な天と区別された「地」に属している。人間は、単に上方だけを見つめ、追い求めているのではなく、同時に、下方を見つめ、追い求めているのである。それは、地を従わせるため、地を人間の世界にすること、地を人間の歴史的事実の舞台および道具へと形成するためである。人間は、単に内面的だけでなく外面的にもその思惟と業において、人間を取り囲んでいる自然の諸力「地霊」(Erdgeister) を思いのままに処理し、それらに対して勝利を収める。人間は、自然の諸力と地霊を探求し自分自身のためにしよう可能なものとし、それらの主としてそれらを仕えさせる。人間は、本来神によって愛され善く創造された。人間は、神に仕え、そして地を従わせるように自由を与えられている。人間は、神の僕でありつつ自然の主である。その限りはよいのである。だが、人間が、「神の僕」としての奉仕から逃げ去ってしまうならば、あの「地」への支配も喪失してしまうのである。⁽⁸⁾

バルトは、「主無き諸権力」について語らざるを得なかったのは、それらが、人間の神からの離反墮落の帰結として、人間の実存と歴史とをあの無秩序へと運び入れるそのものだからである。これに抗して蜂起することが、主の祈りの第二祈願を祈るキリスト者に命じられていることだからである。諸権力は、何ら人間の生の助けをもたらしはしない。また、様々な開放、元気づけ、安楽、豊かになることをもたらしはしない。諸権力は、人間を滅ぼす敵対権力である。しかし、人間的無秩序の王国に、神的秩序の王国が対峙して立っているのである。⁽⁹⁾

3. 御国を来たらせ給え

人間は、自分を神から分離させ、神に対して独立したものとし、絶対的に自立させようとする。しかし人はそこで分を超えてしまうのである。しかし、成功することなどありえない。「天を王座とする方は笑い、主は彼らを嘲られる」(詩編 2 : 4) のである。主無き諸権力の領域の中で生起する弱さと混乱にも関わらず「御国を来たらせ給え」と祈る事実が、ある別の国の存在の尊厳 (Hoheit) と力を証明しているのである。このことが、キリスト教徒が「神への呼びかけ」の行為をなすために所有している自由の特別な点である。「神への呼びかけ」のための自由こそが真の自由である。この自由は、キリスト者が自分で考えだしたり獲得したものではなく、彼らが聴き取った誠めに対する従順への自由、贈り与えられた自由である。キリスト者が神に呼びかけるとき、何を祈り求めるのであろうか。

イエスが弟子たちに教えられた「主の祈り」の第一祈願同様、第二祈願もまた、神の或る行為、即ち、「その射程においてすべての時間と空間を包括する神の行為、しかもそのような仕方ですれ以前に生じたことはなく、またいかなる反復の必要性も可能性もない一回かぎりの神の行為」に視線を向けそこへと方向づけられているのである。ところが、人間の不正義と無秩序と主無き諸権力の支配のもとでは、種々多様なことが繰り返して起きている。このことは、既に、コヘレトの言葉 1 章 2 ~ 11 節で語られていることである。だが、第二祈願で待ち焦がれ待望されて祈り求められている「神の国の到来」は、ま

さに神の行為として、「明けそめよ、汝、美しき朝の光よ。そは、日毎反復再帰するあの古き朝ではない」(スイスの讃美歌の一節)そこで祈り求められているのは、その具体的な内容と輪郭において、他のいかなる出来事とも同種ではなく、また比較できるものでもない。それは、絶対に予期できない仕方、把握できない仕方では生起する。それは、一切のものの地平を上から垂直に破り拓く。このようにして、主はご自分の道を、ご自身の誉れとわれわれの救いの道を行かれるのである。それ故に、「主に呼び求めよ」と「御国を来たらせ給え」と命じられるのである。⁽¹⁰⁾

新約聖書によれば、主の祈りの第二祈願で起こっているように、御国到来が宣教されているところでは詩編33：3で語られている「新しい歌」が歌われているということを熟慮する必要がある。「新しい教え」を人々はイエスから聞いたのである。

神の国の到来こそが、第二祈願の問題である。そして、神の国とは神ご自身のことであると同様に、神ご自身の到来における神の国のことである。神の国とは、人間との出会いのための到来であり、ご自身とは異なる現実全体との出会いのための到来である。神は聖なる方として、また憐れみ深い方として人間世界に到来される。神は到来して義を創りだされる。即ち、創造主たるご自身の誉れを求める熱心において、被造物への燃える愛において、この世界の義しい秩序としての義を創りだされる。神は、神との関係における人間の不義を廃棄される。そして、「地上の平和」が到来する。それが、「神の国」なのである。以上のような仕方以外では、人は神の国をおそらく描写することはできないだろうとバルトは述べている。⁽¹¹⁾

だが、「描写」とは、何を意味するのであろうか。たとえ、そのような描写を厳密に遂行したとしても、結局以下のように言わざるを得ない。そこで表示されたものは、「パラフレーズ」したにすぎないと。神の国とは、周縁における大なる新しきものである。「神の国は人間にとって想像を超えたもの、把握しがたいもの、天が地を越えて高いよりもはるかに高さ(イザヤ55：9)、遂行不可能な思想である」という事態を認識していないのである。ただ、神ご自身の到来の現実性と真理においてのみ、神の国は、人間の諸々の経験と思想との地平の周縁におけるあの「美しい朝の光」の明け初めなのである。それ故、第二祈願は、神ご自身の当来の現実性と真理とを仰ぎ見ている。従って、聖書では、「様々な喩えと比喩」で語られているのである。

以上のことは、この第二の祈願の実践的理解にとって或るきわめて特定の帰結を持つことになる。人間は多くのことに手を伸ばすことができる。だが、神の国に手を伸ばすことは決してできない。しかし、神の国と義は、畑の中にあるあの宝のように(マタイ13：44)、探し求められたり、見つけ出される前に既にそこにあるのである。聖書によれば、神の国とは、一人の人間が大地に種を蒔き、夜寝て朝起きると種は芽を出し成長する。だが、人間はどのようにしてそうなるのか知らない。(マルコ4：26以下)。

「神の国の到来を求める祈りは、神の御名の聖化を求める祈りとまったく同様に、言葉の十全な意味で、純粋な祈りである」ということができよう。純粋な祈りは、神の子らの、天にいます父なる神との関係においてのみ存在する。しかし、祈りとその成就とは、たとえ祈りが純粋な祈りであるとしても、別々の事柄である。祈りが純粋だとしても人間の祈りであり、その成就是神の行為だからである。即ち、「御国を来たらせ給え」という純粋な祈りは、神の国の主権を反射するのである。ところで、問題は、一体どこで、どのようにして、この純粋な祈りが出来事となり、そこで祈り求められている「神の国の到来」の認識が出来事となるのであろうか。バルトは、「新しきものは」既に、既に眼の前に直面させられ、慰められているという。⁽¹²⁾ 新約聖書での神の国に関する良き音信および神の国の現実性と真理についての説教・宣教・証言によると神の国の到来は待望され祈り求められつつ、神の国が「近づき来った」(マルコ1：15)と同時に時が満たされた、即ち、一切がその目標と終焉へと到達したと記されている。「御国が近づき来った」とは、御国の開始と出現が眼前に差し迫っており、既にそこに置かれており、歴史となっていることを意味している。「神の国はあなたがたのただ中にあるのである。これが、「いつ神は国到来するのか」という問いへのイエスの答えである(ルカ17：20以下)。では、神の国が、既に、

出来事となって到来したということは、何を意味しているのだろうか。

この問いに対する考えは一つだけである。それは、新約聖書の言明の中心であり、出発点であり、また目標でもあり、根源・対象・内容であるイエス・キリストの歴史である。それは、唯一なる神の独り子、イスラエルのメシア及び異邦人の救い主、神と人間との仲保者（Ⅰテモテ2：5）、としての彼の語り・行為・苦難・死である。「神の国は近づき来たった」とは、「言は肉と成った、そしてわれわれの間に住んだ」（ヨハネ1：14）ということである。即ち、イエスにおいて、人間の不義と無秩序に抗して闘い、これに勝利し、これを打ち破り除き去り、神の義と秩序が「近づき来たった」のである。最初の弟子たちは、神がイエスを死人の中からの復活において彼らに顕現された時、イエスに直面させられた時、神の国を見たのである。あらゆる時代の人間は、聖霊の力において、生ける主を見ているのである。「今既に」、神の絶対にしきものの秘儀、すなわち神の国の把握不可能と比類なき姿とに直面させられているのを見たのである。⁽¹³⁾

しかし、以下のような事態を明確にしておかねばならない。

- ① まず、「到来したイエスの歴史の完了形を振り返り見る最初期のキリスト教徒たちに対して、全世界の未来形としても現れる力を持っていた」という事実である。この完了形こそが、ただ振り返り見るだけ、単に記念しつつこの完了形を憶えるだけということ許しはしなかった。それを、終末の日（マルコ13：32以下）として、前方を仰ぎ見るように命じたのである。まさに、あの完了形こそが、最初期のキリスト教徒に前方を仰ぎ見る祈り「御国を来たらせ給え」あるいは「主よ来たりませ」、即ち「あなたの大いなるその日において再び来たりませ、かつて既に到来したそのままに」祈るように命じられたのである。
- ② 実に、驚くべきことは、最初期のキリスト教徒は、あの歴史の完了形に従うことができたということである。そして、前方の未来形を仰ぎ見ることができ、心と唇にあの第二祈願を抱きつつ、それに向かって歩むことができたということである。神の国は、初代教会に対して、イエス・キリストの歴史において、既に、現在のものかつ将来的なものとして現れた。初代教会は、イエスの到来、そして神の国の到来への想起と同時に待望において生きた。初代教会は後方を振り返り見たが、同時に、そのところから、前方を見た。

「イエス・キリストの到来と共に、神の国の到来が、最初の弟子たちに、また使徒的教会に、すでに完全に遂行された出来事として、同時に、いまだなお完全に将来的な出来事として叙述することができた」という事実は、どのようにして可能となったのか。それは、イエス・キリストの歴史を復活節の歴史（Ostergeschichte）において現実になったからである。イエスが十字架につけられ死にて葬られ、そして顕現されたことは、歴史の将来においても認識可能となったということでもある。弟子たちは復活の出来事を目撃証人でもある。

最初の弟子たちと共に、使徒的諸教会も、あの復活の出来事に直接には与っていない後のキリスト教徒全体も、イエスと神の国への単なる想起からその待望への転回、あの完成された歴史に対する感謝から将来に対する大なる希望への転回を弟子たちの後から、現代人である我々は一体どのようにして遂行できるだろうか。バルトは、それは、聖霊の賜物による、聖霊の業によって現実となるという。⁽¹⁴⁾「聖霊において」以外の仕方では、つまり、聖霊によってそのことへと開放されるといふ以外の仕方では、誰もイエスを主と呼んだ者はいないし、誰もイエスそのように呼ぶことはない。（ⅠコリントⅠ2：3）イエス・キリストの歴史と神の国の到来の完了形から未来形への転回の可能性は、復活節の出来事と聖霊降臨の出来事とを指示すること以外の仕方では、説明できないのである。⁽¹⁵⁾

注

- (1) 前掲書 p.473
- (2) 前掲書 p.486
- (3) 前掲書 p.491
- (4) 前掲書 p.496
- (5) 前掲書 p.510
- (6) 前掲書 p.522
- (7) 前掲書 p.524
- (8) 前掲書 p.534
- (9) 前掲書 p.546
- (10) 前掲書 p.550
- (11) 前掲書 p.554
- (12) 前掲書 p.576
- (13) 前掲書 p.582
- (14) 前掲書 p.597
- (15) 前掲書 p.598

七. 義が為されよ

「見よ、このような時が来る、とヤハウエは言い給う。その時、わたしはダビデのためにひとつの義しい若枝を起こすであろう。彼は王として支配し、よく統治し、この世に法と正義を創り出すであろう。彼の時代にユダは助けられ、イスラエルは安らかに住むであろう。そして、それによって人々が彼に語りかけるその名はこれである。すなわち、ヤハウエ、ツイドウケヌウ「ヤハウエ、われらの正義」(エレミヤ23：5～6)。キリスト者とは、この方、即ち、ダビデの子、王、その統治、その法と正義を知っている人々のことである。キリスト者は、この方において生起した出来事から出発して歩んでいる。それゆえに、キリスト者は、既に、助けられたユダであり、既に、安らかに住んでいるイスラエルである。それゆえに、キリスト者は、今なお続いている人間の不正義と無秩序の時の只中にありながらも、主無き諸権力の支配領域の只中に今もありながらも、自由と喜びとを持っているのであり、「前方を見よ」「我らの正義なる方を見よ」「この方の時と業を仰ぎ見よ」という誠めを聴いているのである。その人格と共に、御国が既に来たったこの方に「御国を来たらせ給え」「来たりませ、主イエスよ」と呼びかけるのである。⁽¹⁾

キリスト者がこの命令に従うということ、即ち、神に呼びかけるという自由を謙虚に用いることが、不義と無秩序に抗してのキリスト者の蜂起のことである。キリスト者が、神の国の到来のために祈る時、次のことを求めているのである。「神によって起こされたあの王の最終的な顕現と啓示においてこの地に法と正義を創り出すことによって、この錯誤を犯し錯乱した人類を受け入れ憐れんでくださるように」と。キリスト者は、このことを待ち望み、祈り求める。「待つこと」と「祈ること」、これこそが、無秩序に抗する闘いにおいて人間の側からの、見栄えのしない貢献の核心であり星である。彼らは祈るだけではなく行動を起こしている。到来しつつある神に向かって、目標を目指して「競技の走者」として走って行くのである。(ピリピ3：12)「御国が来ますように」と祈るために、自分たちの側からも到来しつつある御国に向かって歩み、走るのである。⁽²⁾

神の国の到来は、新しい地の上・新しい天の下での神の義の顕現である。(イザヤ65：17、Ⅱペテロ3：13、黙示録21：1)。即ち、人間の生、と共生の神の秩序の樹立であり、神の被造物・神の契約相手・神の子供としての人間を癒し助け守る、神の生命の秩序、法の秩序・自由の秩序・平和の秩序・喜びの秩序(ロマ14：17)の樹立である。既に、そのような神の義は、イエス・キリストにおいて完全に現

臨しており、また、イエス・キリストの霊において、彼を認識し愛する人々に対しても現臨している。しかし、キリスト者は、神の国の第一の到来に由来して生きているのであるが、また、新しい神の国の到来に向かって、その日に向かって生きるのである。

ところで、「御国」の到来を求めて祈り、「走る」とは何を意味するのであろうか。バルトは、その答えは、「義が為されよ」(fiat iustitia)であるという。⁽³⁾ その意味は、「御国」を求めて祈るところでは、キリスト者は、人間的義のために闘うことを要求されているのである。問題は、人間的義であって、神の義ではない。神の義を自分自身の手にとめようと欲し、何らかの宗教的、祭祀的(カルト)道徳的、政治的、神の国を地上に打ち建てようとする企ては、キリスト者には何の関係もない。あの「義が為されよ」という句は、ハプスブルク家の神聖ローマ皇帝フェルディナント一世(オーストリア・ハプスブルク家の祖)に由来すると言われている。人間の義は、最善のものであっても、不完全な、問題に満ちたものであろう。しかし、「神の義」との関係の中で生起するとき、神の義に相応しい行動となる。これこそが、人間に委託されている一タラントである。

キリスト者の「御国に相応しい生活、思念、発言、行動とはなにか。それは、いかなる場合にも、人間に視線を注ぎ、身向け、支援することである。神は、人間を引き受け、人間の創造主・父・裁き主・助け主として人間の義を打ち建て上げ、人間に生命・自由・平和・喜びと神の完全なる義を与えられたからである。人間こそがキリスト者にとって重要である。キリスト者は最初から「ヒューマニスト」なのである。従って、キリスト者にとっては事柄それ自体が重要ではない。重要なのは、人間の権利と尊厳の事柄が有益であるか有害であるかという視点のもとでのみ前提である。キリスト者にとっては、いかなる理念・制度・組織・経済形態・国家形態・文化形態・道徳・教育・教養は重要な事柄とならない。キリスト者の前提は、神の義に対応する人間の権利・生命・尊厳だけである。ただ人間だけである。⁽⁴⁾ 勿論、キリスト者は、その都度流行している種々の理念や生活様式との関わりにおいて、味方し反対することを恐れてはならないだろう。

かくしてキリスト者は、「衣装が人々をつくる」(M.ハイデッガー『思惟とは何か』を暗示)を信じない。キリスト者は、鎧や刀を手に入れているからという理由で恐れることはない。キリスト者は人間を、政治家、学問、高い地位にある人として見ることをしない。また、立派な紳士、あるいは服役囚として見ることもしない。さらに、「キリスト者であるか非キリスト者であるか」「良いキリスト者であるか悪いキリスト者であるか」という物差しで見ることは、決してしない。だが、キリスト者は、人間をそのような種々の覆面のもとで見つめるというところで、留まることはできない。それらの覆面は、当の人間自身ではないからである。人間は生き物であるから、ユーモアに振舞うかと思えば、不真面目に振る舞い、臆病に振舞うこともあり、無鉄砲に振舞う生き物である。人間は苦しんでいる。あたかも苦しんでいるかのように覆面するのである。この苦しんでいる者が、神によって愛されているのである。この人間に対して、見ること、理解すること、開放的に心から身向け関わること、慈悲において出会うこと、これが、神の国の到来を求めるように与えられているあの小さな義である。⁽⁵⁾ 人を救うことは神の業であるが、キリスト者に出来ることは、何か。人は希望を失っているので、希望を必要としている。それ故、あの約束を必要としている。約束とは、権利、尊厳、自由、平和、喜びである。キリスト者は、この希望によって生きている。この希望を持つように呼びかけ、約束を仲介し伝えることが、キリスト者の課題である。この課題のために努力し闘うこと、それが、小さな義を実践することなのである。キリスト者は、全線に渡って連帯しつつ、隣人の側に立っていることを表明し(bekennen)、彼の衣装や仮面に頓着することなく、彼の道連れ、友として、彼の事柄を自分自身の事柄としなければならない。「義に飢え渴く者、人権と人間の尊厳を尋ね求める者は、満ち足りるようになるであろう」(マタイ5:6)ということ、キリスト者は知っている。キリスト者は、あの約束、即ち、「人権、人間の尊厳、自由、平和、喜び」が決して奇怪な幻想などではなく、神によって、イエス・キリストにおいて、既に実現されており、その実現された姿において究極かつ最終的に再びイエス・キリストにおいて啓示されるとい

う希望と約束によって生きているのである。キリスト者は、すべての人間にとって、この希望の証人、輝く光（マタイ5：16）でなければならない。これは、教会の宣教課題でもある。キリスト者は、いかなる場合でも、隣人の傍らに立ち、彼を助けなければならない。神の国、父・子・聖霊の国は彼のためにも到来したのであり、なおも到来するであろう。イエス・キリストは、彼の希望である。⁽⁶⁾

注

- (1) KBARTH 『Das christliche Leben』天野 有訳 608頁
- (2) 前掲書 p.613
- (3) 前掲書 p.615
- (4) 前掲書 p.625
- (5) 前掲書 p.630
- (6) 前掲書 p.634

あとがき

「主の祈り」についての著作は多数出版されている。バルト自身もフランス語で書いた小さな著書を著している。だが、『Das christliche Leben』は大著である。しかも、未完である。残念ながら、「御国を来たせ給え」で終わっている。私自身の事を言えば、教会に行き初めた頃どのように祈るのか知らなかったとき、主の祈りを唱えなさいと教えられた。大学の礼拝では、必ず、「主の祈り」を、信仰の有無に関係なく皆で唱えている。

「主の祈り」の第二項の祈願は、「御国を来らせたまえ」である。毎回、無意識に、この祈りを唱えているが、「神の国」を本当に信じて祈っているのか、とバルトは問いかけている。福音とは、神の国である。イエスの第一声は「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ1章15節）、「イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え」（マタイ4章23節）であった。福音書は、イエス・キリストの到来は、神の国の到来として証言しているのである。神の国について、バルトは、完了形と未来形という表現をする。神の国は既に到来した。弟子たちは、「目で見た、手で触れた」（ヨハネの手紙一1：1）のであった。

「主の祈り」はイエスの教えられた祈りである故に、バルトは、喜ばしき「戒命」と言う。「主の祈り」は、イエス・キリストの命令であると、不覚にも考えたことがなかった。教会の使命は福音を伝えることであるが、「神の国」を伝えることには情熱がなかった。今回、バルトのこの著書によって教えられたことを述べて「あとがき」としたい。

2008年10月4日（71歳の誕生日を迎えて）